

公表版

令和7年度 学校外の子供の多様な 学びに関する調査研究事業 実施報告書

令和8年1月
帝京大学ラボ



目次

第 1 章 調査研究の概要.....	3
1.1 調査研究の目的	3
1.2 調査対象（参加者）	4
1.3 活動内容	4
1.4 検証内容・方法	4
1.5 子どもの心理面への配慮.....	5
1.6 実施体制・役割	5
1.7 実施スケジュール・工程	6
第 2 章 各回の活動の構成・内容の効果分析.....	9
【第 1 回 10 月 24 日 金曜日 10:00-11:30】.....	9
【第 2 回 10 月 31 日 金曜日 10:00-11:30】.....	14
【第 3 回 11 月 7 日 金曜日 10:00-11:30】.....	19
【第 4 回 11 月 14 日 金曜日 10:00-11:30】.....	24
【第 5 回 11 月 28 日 金曜日 10:00-11:30】.....	30
【第 6 回 12 月 5 日 金曜日 11:00-12:30】.....	35
【第 7 回 12 月 12 日 金曜日 10:00-11:30】.....	39
【第 8 回 12 月 19 日 金曜日 10:00-11:30】.....	45
第 3 章 子どもの特性と変化の分析.....	51
活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における検証内容と仮説	51
活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における記録方法	51
活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における分析ツール・手法	51
A さん 小学校中学年.....	52
B さん 小学校中学年.....	61
C さん 小学校高学年.....	70
D さん 中学生.....	78
E さん 小学校中学年.....	87
F さん 小学校高学年.....	96
G さん 小学校中学年	103

Hさん 小学校高学年	111
Iさん 小学校高学年	119
Jさん 小学校中学年	127
Kさん 中学生	136
Lさん 小学校高学年	144
第4章 支援者に必要な資質・能力の分析	153
4.1 支援者に必要な資質・能力の検証方法と仮説	153
4.2 支援者に必要な資質・能力の検証における記録方法	153
4.3 支援者に必要な資質・能力の検証における分析ツール・手法	153
4.4 支援者に必要な資質・能力の検証における検証結果	153
4.5 まとめ	154
第5章 調査研究に関する総括	155
5.1 調査研究において実施された活動内容の効果	155
5.1.1 子ども一人ひとりの興味関心を引き出す支援方法	162
5.1.2 子ども一人ひとりの興味関心を引き出す環境設定	163
5.2 支援者に必要な資質・能力	164
5.3 今後の課題	165
5.4 まとめ	166
第6章 フリースクール等における研究成果の実践	167
6.1 実践のための条件	167
6.2 当該活動により効果が表れやすい子ども	167
6.3 望ましい場所・環境	168
6.4 フリースクール等での実践（少額の費用・少数の人員で実践する方法）	168
6.5 実践に向けた留意事項	169
別添 1 AI を使って自己紹介をしてみよう（第4回活動投影資料）	
別添 2 AI を使って100年後の〇〇を紹介してみよう（第7回活動投影資料）	

第 1 章 調査研究の概要

1.1 調査研究の目的

【目的】

近年不登校児童生徒は 11 年連続増加し、過去最多となり（文部科学省、2024）、教育機会の確保とともに子どもの多様な居場所がさらに求められている。一方、不登校の要因として、意欲の低下（32.2%）、不安・抑うつ（23.1%）が挙げられており（文部科学省、2024）、場所を提供するだけでは十分でなく、子どもの心理的サポートも重要だと考えられる。

そこで本調査研究は、1) 子どもの興味・関心を引き出す未来創造プロジェクトを実施し子どもの関係性と視点を拡げること、2) 子どもの行動記録表を作成し子ども理解を深めること、3) 学生パートナーが自身の気付きやかかわりについて ICT や IC レコーダー、録画等を使用し記録し質的研究法を用いて分析すること、の 3 点を行い、心理社会的および発達の観点に基づく子ども理解および支援の手だてやあり方を提示することを目的とする。分析にあたっては、子ども用、学生用アンケートややり取りのデータを精緻に検討するため、会話分析の専門的助言を得ながら、最終的にラボとして子ども一人ひとりの興味・関心、特徴、変化について、その影響要因や効果的関わり等を明らかにし、フリースクール（以下、FS）に還元することを目指す。

【理由】

不登校傾向のある子どもは、少なからず傷つき体験を経験している可能性、また不登校期間が長い程他者や社会的場とのかかわりが減少し内に閉じこもりやすくなる傾向が想定される。そのため、閉じられつつある空間を少しずつ拡張するようないくつかのきっかけが必要となるだろう。その実現には、子どもの関心を引き出す活動を通して、丁寧で温かいかかわりの中で、自身が理解されながら、他者とともに参加しつながる体験をすることも一方略となり得ると考える。

【ねらい】

学生パートナーとの温かいかかわりの中で、①子どもの興味・関心を引き出す新たな活動への参加（ICT を活用した未来創造プロジェクト）、②関係性の拡大（子ども-学生パートナー> 子ども-子ども> 子ども-全体）、③プロジェクトを通した子どもの視点の拡張を目指す。それにより、不登校傾向により狭くなった世界を広げ、新たな視点や関心、活動に目を向ける契機になることが期待される。その過程で、支援者の子ども理解および有用な支援の手だてやあり方について質的研究法を用い検証し提示する。

1.2 調査対象（参加者）

学年	人数		備考
	NPO 法人 結の学び舎いちえ	星槎ジュニアスクール PAL 立川	
小学校低学年(1・2年生)	0名	0名	
小学校中学年(3・4年生)	4名	1名	
小学校高学年(5・6年生)	2名	3名	
中学校 1・2・3年生	1名	1名	
合計	計 12名		

1.3 活動内容

- 第1回 未来を創造しよう！①
- 第2回 自然に触れる①（寄せ植え）
- 第3回 自然に触れる②（植物園）
- 第4回 未来を創造しよう！②（AI講師・AIを利用した自己紹介と将来なりたい自分の画像作成）
- 第5回 創造する①（ブロック創作：未来の自分の部屋を創作）
- 第6回 創造する②（プラネタリウム：時空を超える）
- 第7回 未来を創造しよう！③（ICTを利用して未来都市東京を可視化）
- 第8回 発表会（未来都市東京に行こう！）

1.4 検証内容・方法

<検証内容>

- ・活動開始前後のアンケート（自己肯定感・居場所感）
- ・子どもの他者とのやり取りを含めた参加レベルの変化
- ・学生パートナーの関わり方への子どもの反応
- ・子どもの過去と未来についての意識変化
- ・学生パートナーの子どもに対する捉え方の変化

<方法>

- ・初回・最終回の事前事後アンケート（子ども・学生パートナー）
- ・学生パートナーによる活動後の振り返り

- ・ICレコーダー・録画データによる会話分析
- ・活動中の写真記録
- ・各回終了後の子どもへのアンケート
- ・会話分析専門家による分析

1.5 子どもの心理面への配慮

- ・子どもが安心して過ごし自由に活動できるように、全体での活動空間に加え、最低限のルールのみ設定した。
- ・活動に参加しにくい子どもには、同じ部屋の一角に別途スペースを設け落ち着けるよう配慮した。
- ・その間、学生パートナーは少し距離を取って見守り、活動に興味湧いてきたらさり気なく促した。
- ・子ども同士の間は最初は学生が仲介し、次第に子ども同士のかかわりが増えるよう配慮した。
- ・全体共有が難しい場合は、学生パートナーが代弁したり、動画にナレーションを付ける等の配慮を行った。

1.6 実施体制・役割

団体種別	団体名称	役割	氏名
幹事団体	帝京大学	研究代表者（研究全体の統括）	角南 なおみ
		研究担当者（活動全般の担当・研究代表補佐）	呂 小耘
		研究担当者（調査分析の担当・研究代表補佐）	矢追 健
		研究担当者（調査分析の担当・研究代表補佐）	池田 政俊
外部講師①	帝京大学	第4回・第7回 AI 講師 会話分析	福島 健介
外部講師②	帝京大学	形態素分析	蔡 薰婕
学生パートナー	帝京大学	子どもの伴走支援	14名
協力 FS①	NPO 法人結の学び舎いちえ	子どもの引率、情報提供	竹内 史哉
協力 FS②	星槎ジュニアスクール PAL 立川	子どもの引率、情報提供	藤森 寛史

1.7 実施スケジュール・工程

① 協定締結～調査研究の活動前

No.	日程	対応・調整内容	対応者
1	9/24- 10/23	ラボメンバーで実際の活動と調査研究の詳細検討と微調整	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝京大学 ● 両フリースクール ● 事業プロモーター
2	10/20	学生の活動準備（本プロジェクトと学生の役割の説明、子どもとのかかわりについてのセミナー、振り返りシート、録音や分析説明）	● 帝京大学
3	10/1	必要な備品の申請、調達	● 帝京大学
4	9/24- 10/23	AI 講師との内容調整	● 帝京大学
5	9/29 10/24	活動実施場所視察、活動打ち合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝京大学 ● 事業プロモーター
6	9/24- 10/23	会話分析に係る専門家との活動打ち合わせ	● 帝京大学
10	10/31	研究実施計画書最終稿及び安全対策個別方針提出	<ul style="list-style-type: none"> ● 帝京大学 ● 東京都 ● 事業プロモーター

② 調査研究の活動期間中

活動回	日程	活動の内容	実施場所
1	10/24(金) 10時～11時 30分	<ul style="list-style-type: none"> ● 未来を創造しよう！① ・ 関心のある分野、絵と工作、感想カード 	①
2	10/31(金) 10時～11時 30分	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に触れる① ・ 寄せ植え、感想カード ・ 自分が将来住みたい家の庭をイメージしながら土に触れ、イメージに沿って植物を配置し形にする 	①
3	11/7(金) 10時～11時 30分	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に触れる② ・ 植物園に行く、感想カード ・ 自分が作成した寄せ植えの植生と実際の植物園にある植物の形状や大きさの違いを感じながら観察 	②

		する	
4	11/14(金) 10時～11時 30分	●未来を創造しよう！② ・ AI 講師説明、AI で簡単な制作、感想カード ・ AI 講師がイメージを形にする方法について実際に使って見せ、趣味を含めた簡易的な自己紹介を作成する	①
5	11/28(金) 10時～11時 30分	●創造する① ・ レゴ®ブロック ¹ 、感想カード ・ 未来の地球での生活がどうなっているかというイメージをレゴ®ブロックを使って立体的な模型として作る	①
6	12/5(金) 11時～12時 30分	●創造する② ・ プラネタリウムに行く、感想カード ・ プラネタリウムで、他の惑星のことを知り、宇宙の大きさを体験しながら地球の未来への創造を深める	③
7	12/12(金) 10時～11時 30分	●未来を創造しよう！③ ・ ICT を活用して未来を視覚化する ・ ChatGPT を使い、これまでの体験やイメージを膨らませ、絵、PPT、動画などを使って未来を視覚化する	①
8	12/19(金) 10時～11時 30分	●発表会 未来都市に行こう！ ・ 未来都市に行こう！感想カード ・ 自分が想像する未来の地球を、みんなに紹介し、そのイメージをつなげることで、未来都市を作る	①
随時	随時	・事業プロモーターが制作する事業広報動画への協力	—
随時	随時	・事業プロモーターが制作する事例集の素材提供	—

<実施場所>

- ・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room
- ・実施場所②〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7 3 国営昭和記念公園

¹ 本資料は、LEGO®/レゴ®の商標所有者であるレゴグループの「[フェアプレイポリシー](#)」に則り作成していますが、レゴグループの承認・許可・スポンサー契約を得て作成しているものではありません。

・実施場所③〒192-0062 東京都八王子市大横町9-13 コニカミルタ サイエンスドーム（プラネタリウム）

① 調査研究の活動終了～協定締結期間終了

No.	日程	対応・調整内容	相手先
1	12/19- 1/19	会話分析・学生分析	
2	1/19	中間報告書提出	
3	1/31	実施報告書提出	
4	2/2 - 2/27	公開版作成・事例集	
5	3/14	成果報告会	

第 2 章 各回の活動の構成・内容の効果分析

【第 1 回 10 月 24 日 金曜日 10:00-11:30】

第 1 回の活動概要

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計 3 人
学生パートナー 計 8 人
子ども出席者 計 12 人
子ども欠席者 計 0 人
その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計 6 人

<グループ分けの方法・狙い>

各テーブルに、同じフリースクールで仲のよい子ども 2 名、学生パートナー 2 名の 2 ペアとなるようグループ分けを行った。

<活動内容と狙い>

- ・初回の活動として、子どもと学生パートナーの各ペア間で顔合わせを行い、信頼関係構築の第一歩を踏み出す。初対面の緊張を和らげるため自己紹介から開始。
- ・少し場に慣れた段階で、本プロジェクトを共有する。子どもたちはプロジェクトの協力者であることを伝える。
- ・多様な素材を用いた自由な工作活動を通じて、子どもの興味・関心を把握し、リラックスした雰囲気の中で自己表現を促す。
- ・タブレットを介在し、興味のある内容を言語化する。
- ・相手に伝え、関心を持ってもらうことで、段階的にペア同士で関係を形成していく。
- ・活動全体を振り返り、言語化し表現する。

<環境設定と狙い>

・me:rise 立川 Conference Room

・広いカンファレンスルームに複数のテーブルを配置。中央に材料テーブル（紙粘土、絵の具、画用紙、折り紙、シール等）を設置。

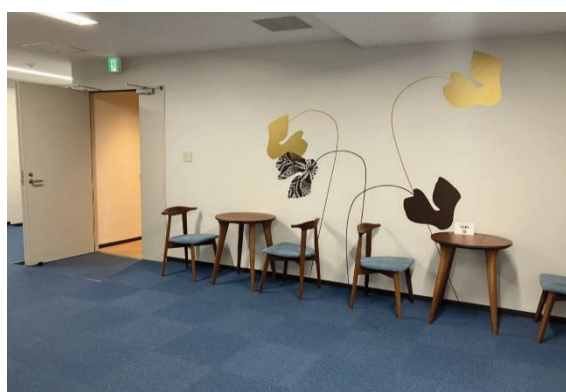
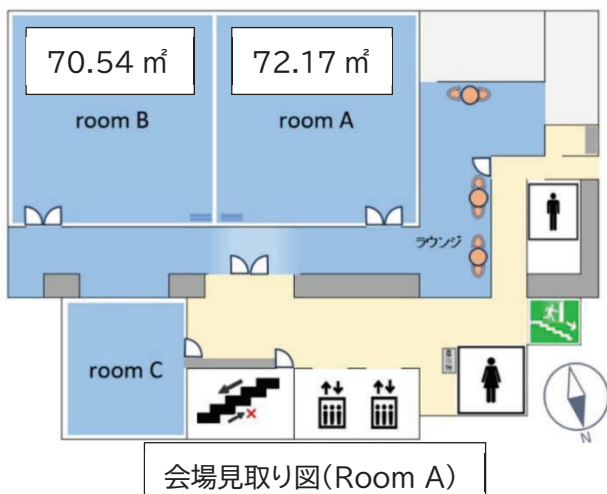
・子どもに対して1対1で学生パートナーを固定配置し、活動に参加しにくい子どもには室外での個別対応を可能とした。

・フリースクールごとにテーブルを分け、各子どもに担当の学生パートナーを1名配置。保護者同席が必要な子どもには保護者スペースを用意した。

<安全対策>

・初めての場所、人に対する不安への配慮として、活動参加を強制せず、保護者同伴や別室での活動も可能とした。

<活動実施場所 : me:rise 立川カンファレンスルーム Room A>



<活動のタイムライン>

● (9時00分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 60分

出席者：研究担当者3名、学生パートナー8名、

- ・会場準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・活動前アンケート（学生対象）の実施。
- ・工作・お絵描きに用いる道具の準備。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● (10時00分) 活動開始：活動概要説明、活動前アンケート（担当者：角南） 10分

- ・ラボメンバーによる自己紹介。
- ・活動の全体構成及び第1回活動の内容について投影資料を使って説明。
- ・子どもたちに100年後の未来を創造するプロジェクトの協力者であることを伝える。
- ・活動前アンケート（子ども対象）の実施。

● (10時10分) 自己紹介 10分

- ・子どもと学生パートナーの各ペア間で自己紹介。
- ・自己紹介の内容例（好きなこと、趣味、好きなゲーム、したいこと、ほしいものなど）をスライドで提示。

● (10時20分) 活動前アンケート 10分

- ・各ペアで、子どもを対象にした活動前アンケートを実施。
- ・iPadに回答を入力するにあたって、適宜、学生パートナーが子どもを補助。

● (10時30分) 工作 45分

- ・画用紙、水性ペン、紙粘土、絵の具セット、マスキングテープ、ひも、紙コップ、ストロー、はさみ、のり、鉛筆等を用いて、自由に工作またはお絵描きを行う。
- ・作品を介して子どもと学生パートナーが会話。適宜、iPadを活用して子どもの作品制作のアイデアを拡張する。
- ・各自作品にタイトルをつける。学生パートナーがiPadで子どもの作品を撮影。

● (11時15分) 全体共有 15分

- ・学生パートナーが会場前方のスクリーンに子どもの作品の写真を投影し、各ペアより作品及びタイトルを共有する。
- ・参加者全員で作品を鑑賞する。

● (11 時 30 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 5 分

- ・各ペアで、第 1 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。
- ・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 35 分) スタッフ間の振り返り 80 分

- ・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・参加スタッフ全員 (ラボメンバー・学生パートナー) で振り返りを共有する。(50 分)

● (12 時 55 分) 会場の片付け 40 分

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

・工作活動に積極的に取り組む子どもが多く、特に紙粘土やお絵描きに関心を示した。「初めて鶴を折ることができて自信につながった」「自分がやると決めたことには微調整を繰り返して集中して取り組んでいた」など、成功体験を得られた子どもが複数見られた。一方、初対面の緊張から「最初は俯き動かず周りからの情報をシャットダウンしている」子どもも見られ、最初は学生が席を外し信頼できる保護者との時間を設け、少しずつ関わることで最後は同席し活動に取り組めた。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

・1 対 1 の配置は効果的で、「子どものペースに合わせて動画のスピードを調整したり、動画を止めて待ったり」といった個別対応が可能となった。「部屋の外の少し静かなところに移動し」た子どもが落ち着きを取り戻す事例があった。

<振り返り等による気づき>

・子どもの興味・関心に合わせた声かけの重要性。「好きなことや趣味について深掘りし、iPad を用いて検索して画像をお互い見ながら会話に繋がられた」ことが関係構築に効果的だった。沈黙を恐れず待つことの難しさが語られた。

<次回に向けた改善点>

・発表時に他の子どもの作品への関心が薄い子どもへの対応方法を検討。作業に熱中しすぎて切り替え

が難しい子どもへの時間管理の声かけ方法を工夫。

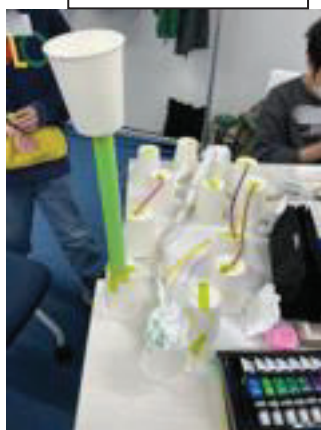
<実際の様子>



自由工作の様子



お絵描きの様子



Eさんの作品



Fさんの作品

活動の全体構成及び第1回活動の内容に関する投影資料



-
- 第1回：今日のよい**
1. お兄さんお姉さんとじこしょうかい
 2. アンケートきょうりょく
 3. 自由に工作やお絵かきをしてみよう！
 4. 写真にとって、名前をつけよう！
 5. えいぞうにうつしてみんなの作品をみてみよう！
 6. ふりかえりシート (毎回)
 7. じかいのあんない

【第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30】

第2回の活動概要

<活動タイトル>

「自然に触れる①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計2人（うち1人は準備時間のみ参加）

学生パートナー 計12人

子ども出席者 計12人

子ども欠席者 計0人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計6人

<活動内容と狙い>

- ・「将来住みたい家の庭」をテーマに寄せ植えを行うことで、「未来の暮らし」を具体的にイメージして表現する。
- ・植物を用いた創作活動を通じて、自然への関心を促し、五感を使った体験を提供する。自然素材に直接触れる体験を通して感覚を広げる。
- ・寄せ植えの過程で子どもの創造性を引き出し、完成作品を通じて達成感を味わう。作品と言葉を通して自分の考えを他者と共有する。
- ・子どもたちが、土に触れることで安心感を得る。身近な状況をイメージすることができる。
- ・土を触るのが苦手な子どもに対し、工作等別の活動を準備する。
- ・自分の作品を保存し、タイトルをつけることで作品を振り返る
- ・全体の場で、自身の作品とタイトルを伝え共有し認め合う。
- ・活動全体を振り返り、言語化し表現する。

<環境設定と狙い>

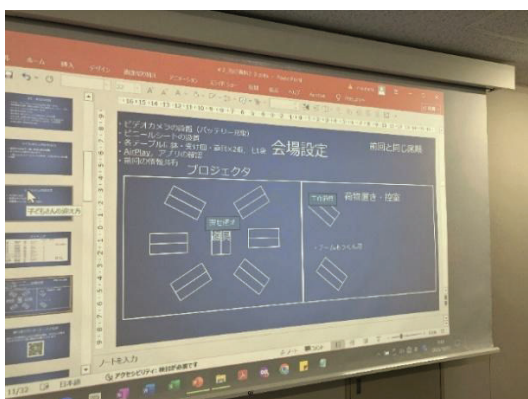
- ・テーブルを汚さないようシートを敷いた。また、活動に必ず用いる植木鉢、土、スコップは活動開始前に予めテーブルに用意することで、子どもたちが植木選びに集中できるようにした。
- ・子どもが安心して過ごし自由に活動できるように、全体での活動空間に加え、最低限のルールのみ設定した。

- ・活動に参加しにくい子どもには、同じ部屋の一角に別途スペースを設け落ち着けるよう配慮した。
- ・その間、学生は少し距離を取って見守り、活動に興味湧いてきたらさり気なく促した。
- ・子ども同士の間は最初に学生が仲介し、次第に子ども同士のかかわりが増えるよう配慮した。
- ・全体共有が難しい場合は、学生が代弁し、動画にナレーションを付ける等の配慮を行った。
- ・テーブルごとに植物・鉢・土・デコレーション材料を配置。紙粘土、絵の具、飾り材料も用意。手洗い場へのアクセスを確保した。
- ・前回の活動で形成された関係性を活かし、同じ学生パートナーとの継続的な関わりを維持した。植物選びから始め、子どもの好みや興味を尊重した活動を展開した。
- ・前回と同様のペアリングを維持し、関係性の継続を重視した。

<安全対策>

- ・土や植物へのアレルギー確認。工作材料の安全な使用について事前説明。

<活動実施場所：me:rise 立川カンファレンスルーム Room A・B>



会場見取り図



会場の様子（全体共有）



退避スペース



会場の様子（活動内容の説明）

<活動のタイムライン>

● (9時00分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 60分

出席者：研究担当者2名、学生スタッフ12名、

- ・会場準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・工作、寄せ植えに用いる道具の準備。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● (10時05分) 活動開始：活動概要の説明（担当者：角南） 5分

- ・全体の活動内容説明活動の全体構成及び第1回活動の内容について投影資料を使って説明。

● (10時10分) 大人参加者の自己紹介（担当者：角南） 10分

- ・学生パートナーが適宜相談・連携できるように、大人参加者（各協カリースクール担当者・事業プロモーター担当者）が自己紹介を行う。

● (10時15分) 学生パートナーとの自己紹介 5分

- ・子どもと学生パートナーの各ペア間で自己紹介を行う。
- ・第1回と異なる自己紹介の内容例を投影資料にて提示。

● (10時15分) 寄せ植えの説明（担当者：角南） 5分

- ・寄せ植えのテーマについて説明。「みらいの庭をそうぞうしながら、よせうえをつくってみよう！」
- ・寄せ植えの作業方法・注意事項を説明。
 - ① 鉢植えの底に石を敷き詰めたうえで土を容れること
 - ② 持ち帰り時の重量を考慮し本活動内では植物に水を与えないこと等
- ・完成次第、作品の撮影やタイトル付けも行うことを説明

● (10時20分) 寄せ植え 20分

- ・子どもたちが、各自好みの植物を1～2苗選び、学生パートナーとペアで、将来住みたい家の庭を想像して、寄せ植えを行う。

● (10時40分) 寄せ植えにした植物について調べる 5分

- ・各ペアで、iPadを用いて寄せ植えにした植物の名前や育て方を調べる。

● (10時45分) 植木鉢への装飾 25分

・各ペアで、折り紙、粘土、絵の具、カラーペン、のり、ボンド等の材料を用いて、寄せ植え作品に装飾を施す。

・各自、作品にタイトルをつける。学生パートナーが iPad で子どもの作品を撮影。

● (11 時 10 分) 全体共有 15 分

・学生パートナーが会場前方のスクリーンに子どもの作品を投影し、各ペアより作品及びタイトルを共有する。

・参加者全員で鑑賞する。

● (11 時 25 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 10 分

・各ペアで、第 2 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。

・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 35 分) スタッフ間の振り返り 80 分

・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート (学生対象) へ回答する。(15 分)

・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り (学生対象) へ回答する。(15 分)

・参加スタッフ全員 (ラボメンバー・学生パートナー) で振り返りを共有する。(50 分)

● (12 時 55 分) 会場の片付け 40 分

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

・植物そのものよりもデコレーションに関心を持つ子どもが多く、「花や植物にはそこまで興味を示していなかった」「紙粘土に絵の具で色をつけてデコレーションするのを楽しんでいた」という反応が見られた。前回より会話が増え、「自分から会話をすることが増えた」「前回よりリラックスしており」など、関係性の深まりが確認された。「本物のシクラメンを見て、粘土で本物そっくりに作ることに夢中だった」子どもも見られた。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

・継続的な 1 対 1 の関係性が効果を発揮し、「前回一緒に話した内容を覚えてくれていた」「自己紹介で聞いたことから会話を広げたことでお互いに共通点が見つかり楽しくコミュニケーションをとることができた」という報告があった。

＜振り返り等による気づき＞

・子どもの興味に合わせた柔軟な対応の重要性。植物より工作に興味がある子どもには、デコレーションを中心とした活動に切り替えることで意欲が向上した。「夢中になっているときに話しかけてよいのか分からずただ見守る場面があった」という支援者の迷いも語られた。

＜次回に向けた改善点＞

・子どもが集中している時の声かけのタイミングと方法を検討。他の子どもとの関わりを促す工夫を追加。

＜実際の様子＞



寄せ植え作品制作(退避スペース)



寄せ植え作品制作



第2回CさんがiPadからアイデアを得て寄せ植え作品を飾り付ける様子




Cさんの作品

第2回活動の内容に関する投影資料

第2回：今日のよてい

1. さんかしゃの大人のじこしょうかい
2. お兄さんお姉さんとじこしょうかい
3. みらいの庭をそうぞうしながら、よせうえをつくってみよう！
4. 写真にとって、名前や育て方をしらべてみよう！
5. できたら、かざりをつけよう！
6. モニターにうつしてみんなの作品をみてみよう！
7. ふりかえりシート（毎回）かんそうをおしえてね
8. じかいのあんない



【第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30】

第3回の活動概要

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

<出席者>

ラボ出席者 計 1 人

学生パートナー 計 12 人

子ども出席者 計 11 人

子ども欠席者 計 1 人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計 6 人

<活動内容と狙い>

- ・子どもたちが、屋外活動を通して、より大きな自然に触れることで、第2回の内容から視点を拡張させることができる。花木園の植物に触れ、前回の寄せ植えから視点を広げる。
- ・写真や動画を使用しながら、植物を観察・記録し、植物への関心を持つ。身近な自然を観察し、多様な視点で捉え、興味関心の広がりを促す。
- ・関心を持った植物を調べ、その理由を学生パートナーと共有する。疑問を調べることで主体的な学びを促す。
- ・自身が撮った画像・映像をもとに興味・関心・気づきを全体で共有することで認め合う。
- ・活動全体を振り返り、言語化し表現する。

- ・撮影した植物の画像に名前を付けて図鑑にすることで興味を引き出す。
- ・iPad を使った植物図鑑作りを通じて、ICT スキルと観察力を育む。
- ・屋外での活動を通じて開放感を体験し、共に行動する学生パートナーとの関係性を深め、自由時間を設けて子供同士の交流を促進する。

<環境設定と狙い>

- ・広大な公園内での移動を伴う活動。各自に iPad を貸与。休憩場所・トイレの場所を事前確認。
- ・移動中に会話の機会を多く設け、関係性を深める。植物に興味がない子どもには「食べられるか調べる」など別の視点を提案。自由遊び時間を設け、子ども同士の交流を促進。
- ・移動時は小グループでまとまって行動。

<安全対策>

- ・保険に加入。
- ・参加児童の保険証のコピーを持参。
- ・緊急時の連絡体制を事前に整備。学生パートナーはスマホを携帯。
- ・広い敷地での迷子防止のため、活動範囲を限定し、集合場所を設定。
- ・学生パートナーへ事前に地図・順路を配布。園内では、移動時・トイレ利用時を含め、子どもとペアで行動する。
- ・参加者は全員リストバンド着用。移動前後、各活動前後に点呼を実施。
- ・熱中症・体調不良時の対応準備。

<活動実施場所：国営昭和記念公園>



花木園売店付近花壇(植物観察実施場所)



花木園売店付近花壇(植物観察実施場所)



みんなの原っぱ(大ケヤキ南側)

解散場所: 原っぱ南売店付近

花木園売店付近花壇

集合場所: 西立川口



みんなの原っぱ(自由行動実施場所)



わんぱくゆうぐ(自由行動)

<活動のタイムライン>

● (9時40分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 20分

出席者：研究担当者1名、学生スタッフ12名

- ・学生パートナーへの園内での行動に関する説明や注意喚起。
- ・緊急時の連絡体制を確認、共有。

● (10時00分) 活動開始：出席確認と移動時の説明、花畑まで移動 20分

- ・出席確認の点呼とリストバンド着用。
- ・移動ルートの確認と注意事項の説明。
- ・子どもと学生パートナーがペアになって入園し、花木園まで移動。

● (10時20分) 花木園での植物観察、植物図鑑作成 25分

- ・花木園到着後に再度点呼を行い、活動内容を説明。
 - ① 植物を観察し、iPadで気になる植物の写真を撮影する。
 - ② iPadで写真に撮った植物の名前を調べる。または自分で名付ける。
 - ③ iPad上で植物図鑑を作成する。
- ・各ペアで花木園を散策しながら、植物観察、図鑑作成を行う。

● (10時45分) みんなの原っぱで自由遊び 30分

- ・花木園出発前に再度点呼を行い、各ペアで会話しながらみんなの原っぱへ移動。
- ・みんなの原っぱへ到着後、再度点呼を行い、自由時間の注意事項を説明。
 - ① 定められた行動範囲内にとどまる。
 - ② 集合時間時間厳守。
 - ③ 学生パートナーと必ずペアで行動する。
- ・各ペアまたは複数のペアから成る小グループで、遊具を使って遊ぶ、鬼ごっこをするなど、自由に活動。

● (11時15分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 15分

- ・集合時に再度点呼を行う。
- ・各ペアで、第3回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに記入する。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11時30分) 休憩 10分

● (11時40分) 移動、スタッフ間の振り返り(担当者:角南) 100分

- ・振り返り場所まで移動(10分)
- ・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート(学生対象)へ回答する。(15分)
- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り(学生対象)へ回答する。(15分)
- ・参加スタッフ全員(ラボメンバー・学生パートナー)で振り返りを共有する。(60分)

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

- ・「外で遊ぶことも嫌いではないという新たな一面を知ることができた」「外での活動と言うこともあったのか、自分のしたいことを主張してくれる」と積極的な子どもがいた一方、「室内遊びの方が関心を持っており、室外との差を少し感じた」「あまり外は好きではない」という子どももいた。
- ・自由遊び時には「白いトランポリンでの遊びが相当楽しそうだった」「逃走中をやりたいと話していた」と子ども同士の交流が活発化した。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

- ・移動中の会話が関係構築に効果的だった。「移動中にたくさん話をできて前回よりも仲良くなれた」。興味のない活動への対応として「食べられるか調べる」視点を提案したことで「ずっと考えていた」と関心が高まった事例があった。

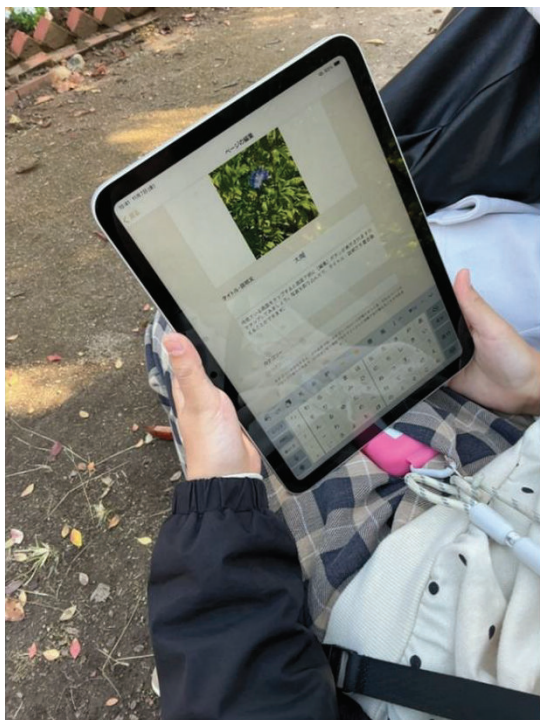
<振り返り等による気づき>

- ・興味のない活動への動機づけの難しさ。
- ・子どもの好みに合わせた活動提案の重要性を再認識。

<次回に向けた改善点>

- ・興味のない活動への参加を促す方法の検討。自由遊び時間の設定により、全体活動とのメリハリをつける効果を確認。

<実際の様子>



植物図鑑を作成するBさん



Kさんが作成した植物図鑑



子供たちと学生パートナーがドロケイの警察役を決めている様子



植物観察の様子

【第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30】

第4回の活動概要

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計 3 人

ラボ出席者 計 3 人（うち 1 人は準備時間のみ参加）

学生パートナー 計 12 人

子ども出席者 計 10 人

子ども欠席者 計 2 人

その他出席者 協力フリースクールのスタッフなど 計 6 人

<活動内容と狙い>

- ・自分の興味・趣味を含めた「将来なりたい自分」を AI 画像として可視化することで、未来への意識を育む。
- ・AI 技術に触れる体験を通じて、ICT への興味関心を促進する。
- ・学生パートナーが子どものアイデアを AI へのプロンプトに変換する役割を担い、会話を通して子どもの創造性を引き出す。

<環境設定と狙い>

- ・各ペアに iPad 配置。スクリーンで AI 講師の説明を投影。
- ・AI 画像生成ツールとして ChatGPT を使用。

<安全対策>

- ・AI 使用に関する個人情報の取り扱いに配慮。不適切な画像生成への対応を準備。
- ・13 歳未満の子供の AI 使用制限を踏まえ、学生パートナーが子どもとの対話の中で意図を汲んで操作し安全性を確保。協力 FS より事前に保護者にその旨案内し、理解を得た。

<活動実施場所 : me:rise 立川カンファレンスルーム Room A・B>



会場の様子（活動内容の説明）



会場の様子（AI 講師の説明）



退避スペースから見た会場の様子

<活動のタイムライン>

- (9時00分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 60分

出席者 : 研究担当者 3 名、学生スタッフ 12 名、

- ・会場・機材準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・AI 講師による学生パートナーへの AI 利用 (ChatGPT) に関する講義と注意事項の説明。
- ・学生パートナーによる AI 画像生成の練習。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● (10 時 00 分) 活動開始：活動概要説明（担当者：角南） 5 分

・活動の全体構成及び第 4 回活動の内容について説明。

● (10 時 05 分) 第 3 回活動の振り返り（担当者：角南） 10 分

・子どもと学生パートナーの各ペア間で、国営昭和記念公園にて撮影した写真、作成した植物図鑑をみながら、第 3 回活動を振り返る。

● (10 時 15 分) AI 使用に関する説明（担当者：福島） 10 分

・AI 講師が AI 生成画像を挿入した自己紹介カードを例示しながら、子どもたちへ自己紹介を行う。
・自己紹介カードのなかで、AI が使用されていた箇所はどこか、子どもたちに問いかけ、子どもたち自身が同様の自己紹介カードを作成することを伝える。

・AI 使用上の注意事項を説明。

① ChatGPT、Copilot、Gemini 等の AI アプリには、13 歳未満の子どもに使用制限があり、13 歳から 18 歳の子どもには保護者の許可が必要であるため、活動中は学生パートナーが子どもとの対話の中で意図を汲んで入力する。

② 家で使用する際は、小学生は大人と一緒に、中学生は保護者の許可を得て使用する。

③ AI に自分の個人情報进行学习させないように投稿する内容に注意する。

・AI へのお願い（プロンプト）の書き方を説明。

① AI に役割を教える。

② AI にやってもらいたい仕事（自分がやりたいキャラクターを指定する）をはっきり書く。

③ その仕事について詳しい注文を書く。気に入ったキャラクターができるまで、細かい注文を加える。基本のキャラクターが完成したら、動作やポーズをつける。

④ やってほしくないこと（制限）を書く。

⑤ 「例えば」を出すことよい。

● (10 時 25 分) AI を用いた自己紹介の作成 25 分

・学生パートナーとのペアで、AI を用いて、今の自分、10 年後のなりたい自分を表すキャラクターの画像を作成する。各ペアで会話しながら、子どもに代わって、学生パートナーが入力。

・AI 講師及びラボメンバーが各ペアの作成状況を見回り、適宜、助言や励まし等、声かけを行う。

・AI 講師より、自分の顔写真を様々なバージョンのイラストに変換可能であるが、自分の顔写真をアップロードすることは危険であるとの注意喚起を行う。

● (10 時 50 分) 自己紹介カードの作成 15 分

・学生パートナーとともに AI で生成した画像を用いて、今の自分、10 年後のなりたい自分について、それ

ぞれ自己紹介文を加え、自己紹介カードを作成する。

- ・各ペアで、誰がどのように自己紹介カードを全体に共有するか、相談する。

● (11 時 05 分) 全体共有 15 分

- ・学生パートナーが会場前方のスクリーンに子どもの自己紹介カードを投影し、各ペアより全体に共有する。

● (11 時 20 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 10 分

- ・各ペアで、第 4 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。
- ・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 30 分) スタッフ間の振り返り 90 分

- ・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・参加スタッフ全員 (ラボメンバー・学生パートナー) で振り返りを共有する。(50 分)

● (13 時 00 分) 会場の片付け 30 分

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

- ・AI 活動への関心は非常に高く、「AI についてはかなり関心を持っていた」「いままでにないほどの笑顔で待っていた」という反応が多数。「自分で入力したい、自分で作りたいという気持ちが強く」主体的に取り組む姿勢が見られた。「プロンプト作成に苦戦はしたものの、最終的に自分が納得のいく画像を生成できた」と試行錯誤を通じた達成感を得る子どもも多かった。一方、「AI が上手く指示に従ってくれなかったりした時に暴言であたりがちよっと目立った」という感情表出も見られた。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

- ・1 対 1 の支援体制が効果的に機能し、「子どもが作りたいものを言って私たちが文字を打って 2 人で協力したことにより、より子どもとコミュニケーションが取れて良かった」。子どもの興味に合わせた柔軟な対応により、「自分の頭の中に理想像のようなものがしっかりとある」ことを引き出した。

<振り返り等による気づき>

- ・AI 活動は興味関心を引き出すのに非常に効果的だった。「指示を AI に出す上で、やはり足りないところ

ろが出てくるためヒントを出すこと(答えではない)で、より意欲的に主体的に活動できた」という支援方法が有効だった。AI がうまくいかない時の感情コントロールへの支援方法が課題。

<次回に向けた改善点>

・AI がうまくいかない場面での声かけ・代替案の提示方法を検討。活動時間の確保。

<実際の様子>



各ペアでAI画像生成に取り組む様子



プロンプトを学生パートナーと一緒に考えるJさん



Cさんの自己紹介スライド発表



活動の様子

※投影資料：別添 1「AI を使って自己紹介をしてみよう（第 4 回活動投影資料）」参照

【第 5 回 11 月 28 日 金曜日 10:00-11:30】

第 5 各回の活動概要

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計 2 人（うち 1 人は準備時間のみ参加）

学生パートナー 計 11 人

子ども出席者 計 11 人

子ども欠席者 計 1 人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計 6 人

<活動内容と狙い>

- ・レゴ®ブロックを使った創作活動を通じて、空間認知能力と創造性を育む。
- ・「未来の自分の部屋」をレゴ®ブロックで表現することで、将来への想像力を刺激する。
- ・子ども同士の関わりを増やすため、フリースクールの先生方と相談し、子どもたちの状況や興味・関心に合わせ、フリースクールを混ぜる形でグループ替えを行った。

<環境設定と狙い>

- ・各テーブルにレゴ®ブロックセットを配置。マインクラフトのキャラクター等、子どもの興味に合わせたパーツも用意。
- ・テーブル間の移動を自由にし、必要なパーツを他のグループから借りる機会を設けることで、子ども同士の交流を促進。
- ・全回固定されたペアリングを維持しつつ、席替えを実施し、新しい出会いも創出。

<安全対策>

- ・小さなパーツの誤飲防止。インタビュー撮影に関する同意確認。

<活動実施場所：me:rise 立川カンファレンスルーム Room A・B>



会場の様子（活動内容の説明）



各テーブルに袋に入れたブロックを配置
（席替え後の自己紹介）



退避スペースの様子



退避スペースからパーティションを越えて
会場へ入室した様子

<活動のタイムライン>

● （9時00分）スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 60分

出席者：研究担当者2名、学生スタッフ11名、

- ・会場準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・ブロック創作に用いる道具の準備。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● (10 時 00 分) 活動開始：席替え（担当者：角南） 2 分

- ・入室時に、異なるフリースクールの子どもたちを混合させる形で席替えを実施し、新しい出会いを創出。

● (10 時 02 分) 活動概要説明（担当者：角南） 2 分

- ・活動の全体構成及び第 5 回活動の内容について説明。

● (10 時 04 分) テーブルごとに自己紹介、近況について共有 4 分

- ・同じテーブルで新たに相席となった子ども、学生パートナーの間で、自己紹介を行い、最近あったことについて雑談する。

● (10 時 08 分) 活動内容の説明（担当者：角南） 2 分

- ・将来住みたい部屋を想像してブロックで表現することを説明。庭や家に拡張してもよい。
- ・各テーブルに用意したレゴ®ブロックの袋を開く。テーブルごとに 1～3 セットを共用することを説明。
- ・異なる種類のレゴ®ブロックがある他のテーブルとブロックの貸し借りを行ってよいことを説明。

● (10 時 10 分) ブロックで将来住みたい部屋を創作 58 分

- ・各ペアで会話しながら、レゴ®ブロックで将来住みたい部屋、家、庭等を自由に創作。
- ・テーブル間で移動し、ブロックの貸し借りをを行い、作品を仕上げる。
- ・学生パートナーが iPad で子どもの作品を撮影。

● (11 時 08 分) 全体共有（担当者：角南） 17 分

- ・学生パートナーが会場前方のスクリーンに子どもの作品を投影しながら、各ペアより作品を共有する。
- ・参加者全員で鑑賞する。

● (11 時 25 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶（担当者：角南） 8 分

- ・各ペアで、第 5 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。
- ・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 33 分) スタッフ間の振り返り 90 分

- ・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート（学生対象）へ回答する。（15 分）
- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り（学生対象）へ回答する。（15 分）

・参加スタッフ全員（ラボメンバー・学生パートナー）で振り返りを共有する。（60分）

● （13時03分）会場の片付け 30分

＜該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果＞

・レゴ®ブロック活動への関心は非常に高く、「元気に部屋に入ってきたため、今日の活動を楽しみに来てくれたのではないか」「いつもとは異なり、他の人の発表は手を止めて聞き、終わった後に拍手ができていた」という変化が見られた。他の子どもとの交流が活発化し、「白いレゴ®ブロックが足りず、他の人から貰うのはちょっと」と躊躇していた子どもが「自ら他のグループに行くようになり、他者との関わりも今日はたくさん見られた」。「レゴ®ブロックにハマった。買って家でやってみようかな。ゲームするよりいいかもしれない」という発言もあった。

＜該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果＞

・テーブル間の移動を自由にしたことで、「使いたいパーツを探し求めに他のテーブルに行き『これ使いたい』『ありがとう』などのコミュニケーションが見られた」。席替えにより「自分からはじめましての人にも自己紹介をしていた」という主体的な行動も見られた。

＜振り返り等による気づき＞

・目的を持った活動が子どもの主体性と他者との関わりを促進する効果を確認。「何か目的を持つことができれば自ら積極的に関わることができる」という発見。インタビュー撮影への緊張感への配慮が必要だと考えられる。

＜次回に向けた改善点＞

・発表の仕方（代読も可能など）の選択肢を増やす。集中力が切れた時の切り替え方法を検討する必要性。

＜実際の様子＞



ブロック創作の様子



テーブル間を移動してブロックを交換している様子



GさんとBさんが一緒に作った作品




Kさんの作品

第5回活動の内容に関する投影資料

第5回：今日のよてい

1. 今日のせつめい
2. 同じ席の人とじこしょうかいや最近あったことなどのお話
3. かつどうのせつめい
4. モニターにうつしてみんなの作品をみてみよう！
5. ふりかえりシート（毎回）かんそうをおしえてね
6. じかいのあんない



【第 6 回 12 月 5 日 金曜日 11:00-12:30】

第 6 回の活動概要

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町 9-1-3 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム）

<出席者>

ラボ出席者 計 1 人

学生パートナー 計 12 人

子ども出席者 計 10 人

子ども欠席者 計 2 人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計 6 人

<活動内容と狙い>

・プラネタリウム鑑賞を通じて、宇宙への興味関心を促し、地球の未来への想像力を広げる。通常とは異なる環境での体験を通じて、視野を広げる。

<環境設定と狙い>

- ・プラネタリウム施設を事前に団体予約。
- ・暗所・閉鎖空間が苦手な子どもへの配慮として、事前に写真で雰囲気の説明し、途中退出可能であることを事前に告知した。
- ・子どもの年齢層を踏まえて、観賞用プログラムを事前に選定。
- ・感想共有は第 5 回と同じ 4～5 人のグループで実施した。グループでの感想共有を通して、席替え後の異なるフリースクール間の子ども同士の交流を促進した。共通の興味（格闘技など）を持つ子どもが自然に会話できる環境を設定した。

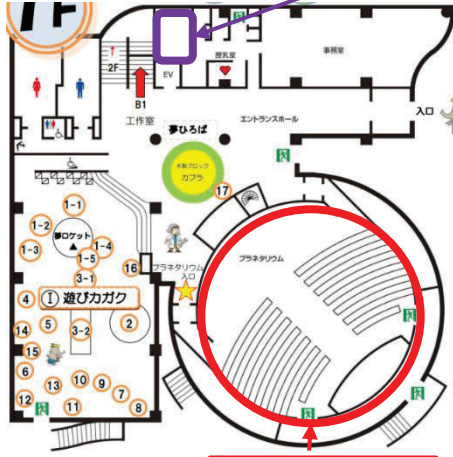
<安全対策>

- ・暗所・閉鎖空間への不安への対応（事前説明、途中退出可）。
- ・迷子防止のため、館内では子どもと学生パートナーとのペアで行動し、参加者はリストバンドを着用した。
- ・体調不良に備えて休憩対応も可能とした。

<活動実施場所：コニカミノルタサイエンスドーム>

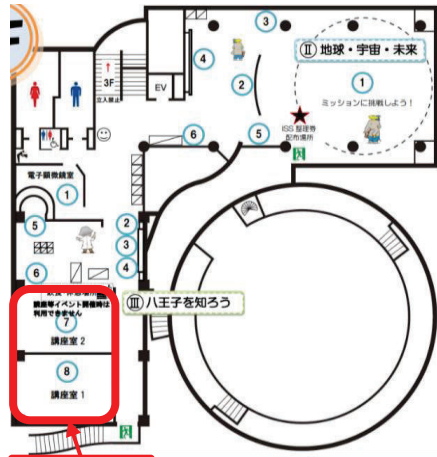
1階見取り図

休憩スペース

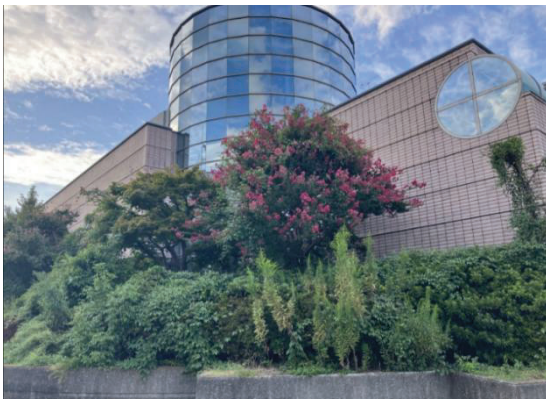


プラネタリウム

2階見取り図



講座室



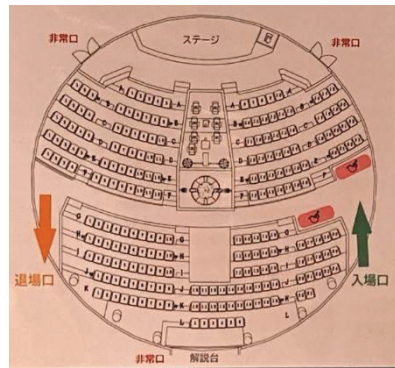
コニカミノルタサイエンスドーム



プラネタリウム



講座室



プラネタリウム内客席図

<活動のタイムライン>

● (10 時 40 分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 20 分

出席者：研究担当者 1 名、学生スタッフ 12 名

・学生パートナーへの当日の活動内容、施設内での行動や注意事項の説明。

● (10 時 55 分) 活動開始：活動概要説明 (担当者：角南) 5 分

・第 6 回活動の内容について説明。

・館内スタッフよりプラネタリウム鑑賞時の注意事項について案内。

● (11 時 00 分) プラネタリウム鑑賞 (担当者：角南) 50 分

・子どもと学生パートナーがペアになって、プラネタリウムへ入場し、好きな場所に着席する。

・館内スタッフより、当日の八王子周辺の星空の解説。

・「宇宙ヒストリア～130 億光年 原子の旅～」という宇宙の 138 億年の歴史物語を鑑賞。

● (11 時 50 分) プラネタリウムから講座室へ移動・休憩 (担当者：角南) 10 分

● (12 時 00 分) 感想共有 (担当者：角南) 15 分

・第 5 回活動時と同じグループで感想を共有する。(子ども 2 名の欠席により 2 つのグループが成立しなかったため、合流して第 6 回のみグループを組んだ。)

● (12 時 15 分) 全体共有 (担当者：角南) 5 分

・各グループから 1 ペアずつ全体に感想を共有する。(子どもの発表、学生パートナーの代行発表のどちらでも可とした。)

● (12 時 20 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 10 分

・各ペアで、第 6 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容に記入する。

・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (12 時 30 分) スタッフ間の振り返り、最終回に向けた打合せ (担当者：角南) 80 分

・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート (学生対象) へ回答する。(10 分)

・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り (学生対象) へ回答する。(10 分)

・参加スタッフ全員 (ラボメンバー・学生パートナー) で振り返りを共有する。(40 分)

・最終回に向け、子どもたちへの贈り物について検討。(20分)

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

・プラネタリウムへの反応は二極化。「星座が沢山現れたり、急に暗くなったり、爆発したりするシーンでよく反応していた」と楽しむ子どもがいた一方、「本当にプラネタリウムが苦手なのか、アンケートも興味がなく、意欲がなかった」という反応も。興味のない活動でも「終わった後に感想聞いたらあまり興味なさそうだったが、しっかり印象に残ったことを言えた。しっかり見ていた」という発見も。異なるフリースクールの子も同士が「格闘技のカードをきっかけに自分から話しかけるような感じだった」と交流する場面が見られた。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

・グループでの感想共有が効果的で、「好きなことである格闘技では自分から他の子どもと関わる様子が見られ、他の子どもと関わるのが好きでないわけではないのだと感じた」という発見があった。共通の興味を持つ子ども同士のマッチングが交流を促進した。

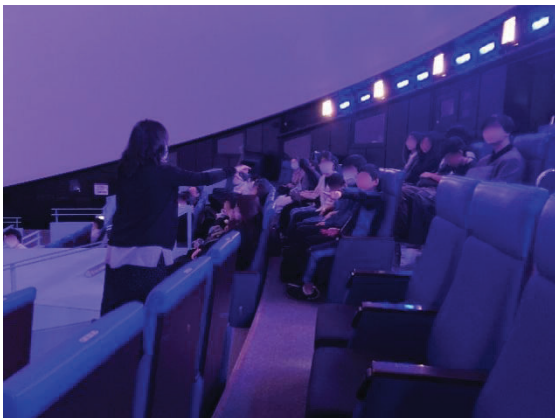
<振り返り等による気づき>

・興味のない活動への動機づけの難しさを再確認。「興味や意欲のないものに対するモチベーション維持」が課題。一方で、共通の興味を持つ子ども同士の自然な交流が生まれる環境設定の有効性を確認。

<次回に向けた改善点>

・興味のない活動への参加を促す方法のさらなる検討。グループ編成時の興味関心の共通点への配慮。

<実際の様子>



プラネタリウム鑑賞



展示物をじっくり見る様子（休憩）



各グループで感想を共有する様子



感想共有の様子

【第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30】

第7回の活動概要

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計2人 (うち1人は準備時間のみ参加)

学生パートナー 計10人

子ども出席者 計10人

子ども欠席者 計2人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計6人

<活動内容と狙い>

- ・これまでの活動を振り返りながら、AIを使って「未来の東京」を可視化する。
- ・学生パートナーとの1対1の関わりの中で、子どもの興味やアイデアを丁寧に言語化し、未来を考えるプロセスそのものを支えることで、主体性の育成と視点の拡張を促す。
- ・動画作成を通じて、ICTスキルの向上と創造性の発揮を促す。

<環境設定と狙い>

- ・各テーブルに iPad 配置。AI 画像生成ツールとして Gemini または Canva を使用。
- ・子どもの興味・関心に合わせたテーマ設定を許容（格闘技など）。学生パートナーが子どものアイデアを言語化する支援を行う。

<安全対策>

- ・AI 使用に関する個人情報の取り扱いに配慮。
- ・13 歳未満の子どもの AI 使用制限を踏まえ、学生パートナーが子どもとの対話の中で意図を汲んで操作し安全性を確保。

<活動実施場所：me:rise 立川カンファレンスルーム Room A・B>



会場の様子（AI講師の説明中）



会場から見た退避スペース

<活動のタイムライン>

● （8時50分）スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 70分

出席者：研究担当者2名、学生スタッフ10名、

- ・会場・機材準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・AI 講師による学生パートナーへの AI 利用（Canva、Gemini）に関する講義と注意事項の説明。
- ・学生パートナーによる AI 画像生成の練習。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● （10時00分）活動開始：活動概要説明（担当者：角南）5分

- ・活動の全体構成及び第7回活動の内容について説明。

● (10 時 05 分) 各ペアでの近況共有 (担当者：角南) 5 分

・子どもと学生パートナーのペアで最近あったことについて会話する。

● (10 時 10 分) 100 年後の東京の構想 (担当者：福島、角南) 10 分

・「100 年後の未来都市 (東京) を想像しよう！」というテーマに沿って、各ペアで、生活、趣味、仕事、旅行、遊び等の未来都市の一端のイメージを話し合い、紙面に描く。

・どのような未来都市を描きたいか、具体的に構想を練った後、AI を用いて画像・動画生成することを予め説明する。

● (10 時 20 分) AI 使用に関する説明 (担当者：福島) 10 分

・第 4 回活動で紹介された AI へのお願いの仕方を再確認。

・AI アプリには、13 歳未満の子どもに使用制限があり、13 歳から 18 歳の子どもには保護者の許可が必要であるため、学生パートナーが子どもとの対話の中で意図を汲んで入力するが、子どもたちも学生パートナーに任せず、主体的に取り組み、「協力して行うように」と指示。

・Gemini を活用した AI 画像生成方法について解説。

① 何を描くか決めて、学生パートナーを介して最初のお願いを入力する。

② 自分の好みを AI に伝えて細かく修正を加えていく。プロンプトの書き方は何回も試す。自分自身を画像・動画に登場させることも可能。

③ 完成したら、画像を紹介する簡単な文章を学生パートナーに話す。

・複数のプロンプトとそれらによって生成された画像・動画の違いを例示し、プロンプトに何回も修正を加えて行くことを促す。

● (10 時 30 分) AI を用いた画像生成 (担当者：角南) 45 分

・各ペアで、紙面に描いたイメージを基に AI 画像生成を行い、細かい修正を重ねる。各ペアで会話しながら、子どもに代わって、学生パートナーが入力。

・AI 講師及びラボメンバーが各ペアの作成状況を見回り、適宜、助言や励まし等、声かけを行う。

・画像生成中に、AI 講師より、下記 2 点について追加説明。

① 全体的に画像を明るくした方がよい。

② 画像に動くものを取り入れると動画化しやすい。例えば、建物は動かない。動きのあるものを多く取り入れて、大きめに描くとよい。

・画像生成時間終了時に、AI 講師より、子どもたちに、学生パートナーに頼らず、自分で取り組むこと、パソコン操作に年齢制限はないので、触れることを推奨。

● (11 時 15 分) 作品制作の感想共有 (担当者：角南) 10 分

- ・各ペアで作品制作の感想を共有する。
- ・各ペアより全体に感想を共有する。

● (11 時 25 分) 振り返りシート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 10 分

- ・各ペアで、第 7 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。
- ・次回活動の案内、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 35 分) スタッフ間の振り返り 120 分

- ・第 7 回活動を踏まえ、AI 講師による AI 動画生成方法に関する講義、学生パートナーによる練習 (30 分)
- ・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り (学生対象) へ回答する。(15 分)
- ・参加スタッフ全員 (ラボメンバー・学生パートナー) で振り返りを共有する。(60 分)

● (13 時 35 分) 会場の片付け 30 分

<該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果>

・AI 活動への関心は引き続き高く、「自分の興味のあることなので、期待や関心を持って活動に参加しようとする」姿勢が見られた。「うまく言語化ができなくても頭の中にある理想をなんとか形にしようとしていた」と試行錯誤する姿勢が見られた。一方、「AI が上手く指示に従ってくれなかつたりした時に暴言であつたりがちょっと目立った」という感情表出も継続して見られた。「動画の作り方に集中していて、AI が動画を作成している間の待っている時間でも真剣な表情で画面を見つめていた」という集中力も確認。

<該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果>

・子どもの興味に合わせた柔軟なテーマ設定が効果的だった。「好きな虫を中心に画像生成をする」ことで意欲が向上した事例など。「回を重ねるたびに自分の話をしてくれるようになった」という関係性の深まりも確認。

<振り返り等による気づき>

・AI がうまくいかない時の感情コントロールへの支援が引き続き課題。「AI に対してイラついてしまってその

時に上手く処理というか宥めたりした方が良かったのか」という支援者の迷い。動画作成の技術的な難しさへの対応も課題。

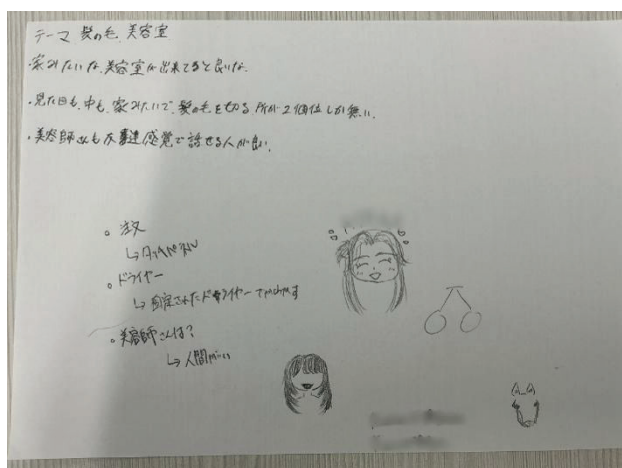
<次回に向けた改善点>

・AI がうまくいかない場面での代替案の提示。動画作成の事前練習・説明の充実。次回が最終回であるため「感謝の会」の準備とフリースクールとの共有。

<実際の様子>



Dさんが学生パートナーと画像生成を行う様子



Dさんの100年後の美容室の構想



Dさんの作品「100年後の美容室」



Jさんのプロンプト修正前の作品



Jさんのプロンプト修正後の作品



Jさんの作品をのぞき込むHさん



Jさんが学生パートナーと画像生成を行う様子

※投影資料：別添 2「AI を使って 100 年後の○○を紹介してみよう（第 7 回活動投影資料）」
参照

【第 8 回 12 月 19 日 金曜日 10:00-11:30】

第 8 回の活動概要

<活動タイトル>

「発表会」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

<出席者>

ラボ出席者 計 2 人

学生パートナー 計 12 人

子ども出席者 計 12 人

子ども欠席者 計 0 人

その他出席者 協カフリースクールのスタッフなど 計 6 人

<活動内容と狙い>

- ・これまでの活動の集大成として、作成した作品を発表し、達成感を味わう。
- ・第 7 回活動時間内で画像の動画化に至らなかった子どもが多かったため、継続して取り組む時間を確保。
- ・最後に「ありがとうの会」を設けることで、子どもと学生パートナーが、活動を振り返り、お互いに手紙や作品を贈り合い、子どもを承認する場とする。
- ・活動を通じて形成された関係性を振り返り、今後への期待につなげる。

<環境設定と狙い>

- ・AI 動画編集ツールとして Gemini または Canva を使用。
- ・発表用のスクリーン設置。アルバム・賞状・メッセージカードを準備。
- ・発表は任意とし、代読も可能とする。アルバム・賞状を通じて活動の思い出を形に残し、関係性の継続を示唆する。
- ・前回と同様のペアリングを維持。

<安全対策>

- ・最終回に向けた心理的準備への配慮。別れの場面での感情への対応。
- ・13 歳未満の子どもの AI 使用制限を踏まえ、学生パートナーが子どもとの対話の中で意図を汲んで操

作りし安全性を確保。

<活動実施場所 : me:rise 立川カンファレンスルーム Room A・B>



会場の様子(退避スペースなし)



各テーブルに子供たちへの賞状・メダルを入れた茶封筒配置(ありがとうの会)



会場の様子(終了後のスタッフ振り返り)

<活動のタイムライン>

● (9時00分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> 60分

出席者 : 研究担当者 3名、学生スタッフ 12名

- ・会場・機材準備。
- ・学生パートナーへの当日の活動説明。
- ・子どもたちへの賞状、アルバム、メダルの準備。
- ・子どもたちの受入れ準備。

● (10時00分) 活動開始 : 活動概要説明 (担当者 : 角南) 5分

・活動の全体構成及び第 8 回活動の内容について説明。

● (10 時 05 分) 各ペアでの近況共有 (担当者：角南) 5 分

・子どもと学生パートナーのペアで最近あったことについて会話する。

● (10 時 10 分) 第 7 回活動で制作した画像の動画化 (担当者：角南) 20 分

・各ペアで第 7 回活動時に制作した画像を動画化する。各ペアで会話しながら、子どもに代わって、学生パートナーが入力。

・制作した動画について、子どもが学生パートナーに詳しく説明し、お話を創る。

・各ペアで、発表会でどのようなお話を共有するか、話し合う。

● (10 時 30 分) 発表会 (担当者：角南) 20 分

・学生パートナーが、iPad 上の画像または動画を会場前方のスクリーンへ投影。各ペアより全体に画像または動画作品を共有。

● (10 時 50 分) ありがとうの会 (担当者：角南) 20 分

・各ペアで、学生パートナーが事前に作成した活動写真のアルバムを見ながら、全 8 回の活動を振り返る。アルバムには、学生パートナーから子どもへのメッセージを掲載。

・子どもから学生パートナーへ、予め準備したメッセージや工作を贈る。

・学生パートナーから子どもへ、子ども調査員が頑張ってくれたことを賞して、賞状、メダルを贈呈。表彰状には、学生パートナーが子ども一人ひとりの取り組み状況を考慮し、独自に考案したタイトルを付与
(例：「最後まであきらめなかったで賞」「せっきよくてきに参加できたで賞」「想像力が豊かだったで賞」)

● (11 時 10 分) 振り返りシート、活動後アンケート、活動終了の挨拶 (担当者：角南) 15 分

・各ペアで、第 8 回活動を振り返り、学生パートナーが子どもから聞き取った内容を振り返りシートに入力する。

・活動後アンケート(子ども対象)の実施。

・各ペアで、全体で、活動終了の挨拶。

--- 子ども、協力フリースクール帰宅 ---

● (11 時 25 分) 会場の片付け 30 分

● (12 時 55 分) スタッフ間の振り返り 80 分

・学生パートナーが、各自、活動記録アンケート(学生対象)へ回答する。(15 分)

- ・学生パートナーが、各自、活動後の振り返り（学生対象）へ回答する。（15分）
- ・参加スタッフ全員（ラボメンバー・学生パートナー）で振り返りを共有する。（40分）
- ・心理学部、教育学部ごとのグループで学生パートナー同士の振り返りを行う。（10分）

＜該当回の活動内容に対する子どもの反応・分析結果＞

・発表会では「他の子どもの発表に対して普段は反応が見られないが、今日は『すごい』という反応があったり、作品をみて微笑んだり、学生パートナーが拍手をしていなくても自ら拍手をしたり、他の子どもへの意識があった」という変化が見られた。「今までは席で挨拶をしたらそれで終わりだったのだが、今日は名残惜しくなってくれたのか、帰り際に何度も手を振ってくれた」「『次いつ会える？』と尋ねられた」という関係性の深まりを示す反応も見られた。アルバム・賞状の贈呈では「宝物にする」と喜ぶ姿が見られた。手紙を書いた子どももあり、「普段読み書きをあまりしないとのことだったのに、手紙を書いた」という変化も確認された。

＜該当回の環境設定に対する子どもの反応・分析結果＞

・発表を任意としたことで、「共有を拒んだ際に無理にやらせず本人の意志を尊重し、『自分にはどんな感じが良かったか』、『何を意識したかった？』などの感想を個人の間で共有した」という柔軟な対応が可能となった。アルバム・賞状の贈呈は関係性の象徴として効果的だった。

＜振り返り等による気づき＞

・全8回の活動を通じた子どもの変化を実感。「最後のアンケートで第1回の際は、自己肯定感が低いような回答が多くみられていたが、今回は『信頼できる人がいる』など他者との関わりや信頼において『ややそう思う』という回答が多くなった。」「私が何かしたわけではなく、緊張がほぐれて、本人の本来持っている個性が開花した」という支援の本質への気づき。

＜次回に向けた改善点＞

- ・活動終了後のフォローアップ体制の検討。

<実際の様子>



動画制作の様子



発表会の様子



学生パートナーからアルバムを受け取る様子



学生パートナーからメダルを贈られる様子



美容師になりたい子供からヘアピンの
贈り物を受け取る学生パートナー



子供から工作入りのメッセージを
受け取る学生パートナー

第8回活動の内容に関する投影資料

第8回：今日のよてい

1. 今日のせつめい
2. 同じ席の人とじこしょうかいや最近あったことなどのお話
3. かつどうのせつめい
4. AIを使って前回の画像の動画を作ろう！
5. 発表会
6. ありがとうの会
7. ふりかえりシートとアンケート：
かんそうをおしえてね



発表会



ありがとうの会



第3章 子どもの特性と変化の分析

●活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における検証内容と仮説

・ラボとして想定した「全回の活動を通じた変化と仮説」は、以下2点である。1) 子どもの興味・関心を引き出す未来創造プロジェクトを段階的に実施することで、子どもの視点を拡張し得るのではないか。2) 最初に子どもと学生パートナーの関係性を構築しその関係が深まることで、子ども同士の関係、その後全体としてのつながりやかかわりへ広がるのではないかと。この2点について、全8回の活動を通じて変化を定量的・定性的に検討していく。

学生パートナーが心理社会的および発達の観点に基づく子ども理解を行うことで、特性に応じたかかわり（支援方法）可能になり効果的な影響を及ぼすのではないかとという仮説を生成した。具体的な影響として、上記とも関連する関係性の形成および興味・関心を伴う活動への参加を想定した。

●活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における記録方法

本調査研究では、全回の活動を通じた変化・特性に応じた支援方法等の分析において、子どもと学生パートナーそれぞれから記録を収集した。

以下は、子どもによる記録方法である。

- ・全体活動前：未来展望尺度、視点拡張尺度、自尊感情尺度などのアンケートに回答
- ・毎回の活動後：活動に関する振り返りを記述
- ・全体活動後：全体活動前と同様のアンケートに回答

以下は、学生パートナーによる特性に応じた支援方法等における記録方法である。

- ・全体活動前：子どもとかわることについての事前アンケートに回答
- ・毎回の活動中：ICレコーダーで活動中の子どもとのやり取りを録音
- ・毎回の活動後：活動に関する振り返りを記述
- ・全体活動後：未来展望尺度、視点拡張尺度、自尊感情尺度などのアンケートに回答
- ・全体の様子：当日子どもとペアを組まない学生パートナーによる画像や録画等を使用し記録

●活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における分析ツール・手法

- ・アンケート：記述統計量の可視化、参加者ごとの傾向の分析
- ・質的補完：上記数量解析に自由記述の内容分析を加える
- ・活動記録の音声データ：AIによる起点となる声かけやその後の行動発展の特徴分析および会話分析
- ・活動記録・自由記述：内容分析

Aさん 小学校中学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・性格的に明るい。初対面の人とでも気兼ねなく話すことができ、特にゲームなど共通の話題があると打ち解けやすい。
- ・他者と距離感が近すぎてトラブルになることがある。知りたいことがあると分かるまで相手に聞くため、相手によっては迷惑と捉えられてしまうことがある。
- ・ゲームや水泳が好き。身体を動かすことを好む。
- ・何かを作る時に、自由に作らせてもらえないとやる気を失う傾向がある。細かく指示されると飽きてしまう。本人が助けを求めたときに助言する関わりが適している。褒めて伸びるタイプ。
- ・興味の移り変わりが激しい。多動傾向があり、集中力があまり続かない傾向。本人が楽しめないと判断するとすぐに他のことをしてしまう。
- ・書字、長時間座って話を聴くことが苦手。
- ・注意散漫で、忘れ物が多い。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・初めての場所・人に対して緊張するが、工作活動には興味を示すのではないかと。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・大人しく質問に対しても返答してくれるが口数は多くなかった。
- ・緊張感があったのか、事前のアンケートの様子より人の話を聞いたりして落ち着いていた。

<活動中の様子>

・工作の時間にすぐに道具のある机に向かい選んでいた。趣味のゲームの話をした時に積極的に話をして
いた。紙粘土を一心不乱にこねていた。

<活動終了時の様子>

・自分の自己紹介が終わった後、同じ机の子の紹介の際に手元の紙に落書きをしていた。

<第1回の活動による子どもの変化>

・最初はよそよそしかった態度が質問に対してはっきりと答えるようになった。
・明るく社会的な一面を見せた。工作場面で提案を取り入れる柔軟性がある。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

・前回よりもスムーズに会話ができるのではないかな。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・入室時から明るく場に慣れた様子だった。

<活動中の様子>

・「なんでもいいよ」、「土足りなく無い？」などを言っていたが黙々と作業を進めていた。花に関するエピソードを自分から話していた。
・花についての関心が高いようで積極的に写真を撮っていた。完成させることを強く意識していた。

<活動終了時の様子>

・前は完成しなかったことを反省点であげていたが、今回は完成したので前回より表情が明るかった。
・「まだ待って」と言われ、完成したのを見せたいという意思を感じた。

<第2回の活動による子どもの変化>

- ・こちらから話してもあまり答えが返ってこなかったときから質問には返してくれて自分から話してくれるなど会話がよりスムーズになった。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

- ・外活動なのでより本人らしい活動が見られるのではないか。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・前回よりも無表情だった。

<活動中の様子>

- ・トランポリンで初めて出会った年下の子どもを気遣う様子や1歳くらいの子どものお世話をしていた。
- ・花の写真を撮ることに興味はあるが内容には強い興味は無く、やることに集中していた。

<活動終了時の様子>

- ・表情も明るく満足そうな顔をしていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

- ・体を動かすことの方が好きなので満足感が高かった様子が見られた。
- ・人に優しい子どもであることが分かった。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・これまでで信頼関係や楽しい思い出を築けたのでより意欲的に関わられるのではないか。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・入室時から明るく落ちついていました。
- ・AIというワードや ChatGPT に意識が集中していた。

<活動中の様子>

・これまでの中で関心が強いようで作業に集中し多動行動がおさえめであった。自ら声を出すことも多くなった。

<活動終了時の様子>

・「ありがとうございました」や、アンケートで「～です」と答えるなど言葉遣いが丁寧になった。学生パートナーが「またね」と手を差しだすと握り返した。表情はいつもより明るかった。

<第4回の活動による子どもの変化>

・この活動への意欲が高まっている。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・今回グループが違いためいつもより緊張が見られるかもしれない。レゴ®ブロックで想像力豊かな場面が見られるかもしれない。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・同席予定の子どもが休みになり、相手がいない状態であったが特段様子は変わらずマイペースであった。

＜活動中の様子＞

・こだわりを見せた場面が多く、パーツを譲って欲しいという声掛けにも自分の気持ちを前に出して渋ることが多かった。

＜活動終了時の様子＞

・ギリギリではあるが作品が完成して満足そうな様子だった。帰宅の際、手を振るだけでなく手が触れるように自主的に動いていた。

＜第5回の活動による子どもの変化＞

・信頼関係の構築は進んでいるのでより仲良くなれるのではないか。同席の子がいなかったため今回他の子どもとの関係はあまり見られなかった。

（第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30）

＜活動タイトル＞

「創造する②」

＜実施場所＞

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-1-3 コニカミノルタサイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・プラネタリウムに対して興味を示していたので楽しんで見るのではないか。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・新しい場所について関心があるようでソワソワしていた。

<活動中の様子>

・星にはある程度興味はあったが、科学的な説明には関心をあまり示してなかった。感想会ではHさんの話し声のボリュームに怖気付いていた。

<活動終了時の様子>

・同席していたHさんのペースに飲まれ、いつもよりハイテンションで関係の無い話をずっとしていたが、帰る時はスッと帰っていた。

<第6回の活動による子どもの変化>

・子どもと学生パートナーの関係は構築されてきた。今後、子ども同士の関係構築に良い変化があるのではないかと。

(第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・学生パートナーが欠席のため別の学生パートナーが担当することになり、緊張してあまり話してくれないかもしれない。

●第7回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

・緊張している様子もあり、あまり話題は広がらなかった。タブレットに興味があるようで、ゲームについて検索していた。

<活動中の様子>

・自分の想像することを他の人に伝えることが得意でなく、表出することに抵抗があるようだった。一方で「自分で入力したい」、「自分1人で作りたい」という意識があるようで、自分でタブレットを操作する場面が見られた。その中で学生パートナーが本人の興味のあるものについて触れると少しずつ自分の考えを話すようになった。

<活動終了時の様子>

・活動終了時には A さんから関わることも多く、ハイタッチをするために自分から手を出したり、帰り際に振り返って手を振ってくれる場面もあった。

<第 7 回の活動による子どもの変化>

・自分でやりたい気持ちが強かった。少しずつ学生パートナーにも考えを話してくれるようになるのではないかと。

(第 8 回 12 月 19 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 8 回の活動による変化の仮説

・前回、担当する学生パートナーが出席できなかったため距離が開いているのではないかと。

●第 8 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・間が空いたにも関わらず、学生パートナーにいつも通り積極的かつ好意的に関わっていた。

<活動中の様子>

・動画の生成が上手いかず、殆どの時間先生に iPad の設定を調べてもらうことになってしまい、焦りや不安を全面的に出していた。

・100 年後の東京の発表では全体的に発表をよく聞いていた。

<活動終了時の様子>

・学生パートナーが作成して渡したアルバムや賞状を渡した時「宝物にする」と言っていた。

・活動通して満足感が高かったのか明るい表情が続いていた。一方、別れを惜しんでおり、何度もこちらの方を見ていた。

<第 8 回の活動による子どもの変化>



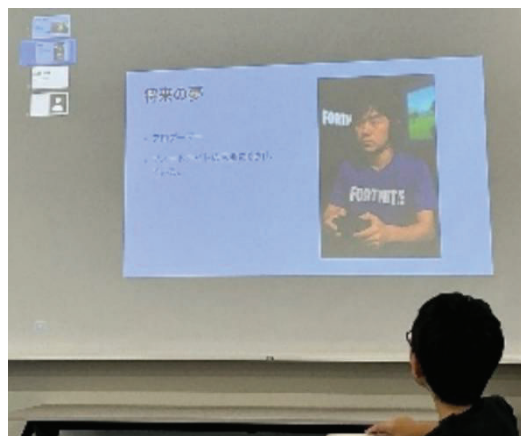
第 1 回 A さんの自由工作作品



第 4 回 A さんが学生パートナーと AI 画像生成に取り組む様子



第 4 回 A さんの AI 画像生成作品「今の自分」



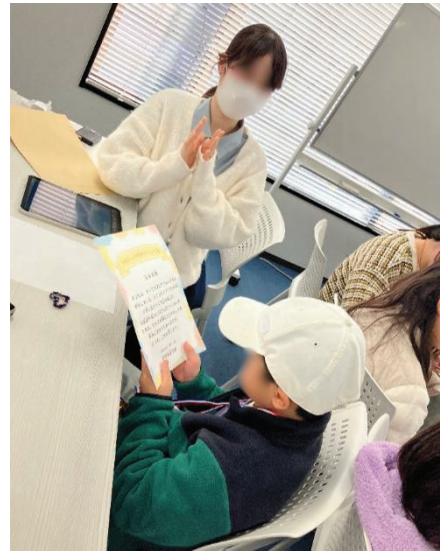
第 4 回 A さんの自己紹介カード「10年後の自分」の発表



第 5 回 A さんが学生パートナーとブロック創作に取り組む様子



第 8 回 A さんと学生パートナーが
100 年後の東京の画像を発表する様子



第 8 回学生パートナーから賞状を受け取る A さん

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は緊張が見られ口数も少なかったが、回を重ねる中で場や学生パートナーに慣れ、自分の興味関心を軸に主体的に活動する姿が増えた。工作や AI など好きな分野では集中力が高まっていた。
- ・感謝や別れを惜しむ言動など、感情表出や対人関係の広がりが見られた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・本人の興味を起点にした関わりや、無理に発言を求めず自分で選び操作できる余地を残した支援が有効だった。
- ・こだわりを尊重しつつ言語化を促す声かけや感情受容により、安心感が生じ、徐々に自分の考えや気持ちを表現できるようになった。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・慣れた場所を継続的に使用しつつ、屋外活動や新しい施設など多様な環境を取り入れたことで、経験と視野が広がった。
- ・少人数で落ち着いて取り組める配置や、自由に制作・操作できる環境は集中と満足感の向上につながりやすかった。

Bさん 小学校中学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・好奇心旺盛で、様々な活動に積極的に参加する。
- ・絵を描くことが好き。
- ・仲の良い特定の子ども（Gさん）とはよく話すが、他の子どもと話すことがない。いつもGさんと2人で行動しているが、ひとりで行動、活動に参加することに抵抗は示さない。
- ・対人関係に苦手意識がある。初対面の人には、緊張して自分から話すことができない。打ち解けるまでに時間を要する。
- ・自己表現、言葉にすることが苦手。どのように言っているのかわからないと黙り込んでしまう。相手の意図がわからないと黙り込んでしまうが、無視しているわけではない。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・仲良しの友達とペアで動くことが多いとの事前情報により、初回はなかなか話ができないのではないか。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・学生パートナーとはあまり話をせず、仲良しの友達と小さな声で話していた。

<活動中の様子>

- ・絵を描くことが好きな様子で、集中して活動に取り組んでいた。

<活動終了時の様子>

- ・時間がない、あと5時間くらいほしかった、というほど活動に十分参加できていた。

<第 1 回の活動による子どもの変化>

・最初は緊張し、周囲を伺いながら学生パートナーとも距離を取っていたが、少しずつ声も大きくなり活動を楽しんでいる様子だった。

(第 2 回 10 月 31 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 2 回の活動による変化の仮説

・担当する学生パートナーとは初めての関わりとなった。部屋に入ってきた時から Gさんとずっと一緒に口数も少なかったため、仲良くなるのに時間がかかるのではないか。

●第 2 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・口数が少なく話しかけても反応が薄い。

<活動中の様子>

・Gさんとはよく喋る。お花に興味があり、選んだお花であるシクラメンについて調べる。飾り付けを粘土やモールを用いて細部にまでこだわって行う。

<活動終了時の様子>

・最初よりも話してくれる。楽しかったと言い、次回の活動も楽しみにしている様子だった。

<第 2 回の活動による子どもの変化>

・自身の趣味や将来の夢について話すようになり、途中から思ったより会話ができるようになった。

(第 3 回 11 月 7 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町 3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・植物には興味があるとのことだったため、図鑑作成の時間だけでなく自由時間も植物観察をするのではないか。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・ノートに木の絵を描いていた。話しかけると学生パートナーのことを覚えており、仲良しの友達が休みだったこともあり会話も続いた。

<活動中の様子>

・植物に関心があり、iPadを渡すと画角に拘りながらたくさん写真を撮っていた。

<活動終了時の様子>

・たくさん遊んで楽しそうだった。次回の活動も楽しみにしていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・外遊びで思ったよりアクティブに遊んでいる姿を見られた。

（第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・AIに興味があるとのことだったのでより関心を持って活動に参加するのではないか。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・今回は漫画を2冊持ってきていたが、読んでいる様子はなかった。最初は学生パートナーとは挨拶程度で他はGさんと話していた。前回の振り返りの際、同回に参加できなかったGさんと一緒に自分が撮った写真を見返し、学生パートナーにお気に入りを見せていた。時間が余り、iPadのアルバム内の機能で遊んでいた。

＜活動中の様子＞

・AIに興味が高く、前向きに参加していた。設定もいろいろ考えていた。ネット環境やChatGPTの調子が悪く、各課題に対して画像が1枚ずつしか生成できなかったのが残念そうだった。今までより他の子どもの発表に興味を示していて、笑う等のリアクションも見られた。

＜活動終了時の様子＞

・活動中と変わらず、残念そうな様子も見られたが、終了後も少しだけ雑談をして手をふって学生パートナーと別れた。

＜第4回の活動による子どもの変化＞

・予想通り意欲的に活動に取り組み、創造的な作品を作成した。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「創造する①」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・こだわりを持って制作するのではないか。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・レゴ®ブロックを目にした時から早くやりたそうだった。自己紹介で、夏休みに旅行に行ったことを学生パートナーに話していた。（以前は話せなかった）

<活動中の様子>

・ハイテンションで、歌いながら活動していた。Gさんと使いたいパーツが被り、若干険悪なモードになったが、お互いパーツを交換することで落ち着いた。他のテーブルにパーツ探しに行ったが自分から他の子どもに話しかけることはなかった。学生パートナーに欲しいパーツを伝え、やり取りは学生パートナーが行った。テーマは部屋づくりだったが花壇をずっと作っていた。発表の際は他の子どもの作品にはほとんど興味を示さず、制作を続けていた。

<活動終了時の様子>

・Gさんの作品と合体させて一つの作品にしていた。もっと時間が欲しかったと言っていた。

<第5回の活動による子どもの変化>

・全体テーマよりも自分の作りたいものに焦点をあて、そこに集中していた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-13 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・プラネタリウムを見たことがあると言っていたので、楽しむのではないかな。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・Gさんとじゃれ合っていた。展示の方に強く関心を持っていた。

<活動中の様子>

・プラネタリウムは「見たことあるやつ」と言っていたが集中して楽しんでいた。展示のキツネ等の剥製や八王子ゾウについて興味を持っていた。「新しい星座を作るなら？」という話を楽しそうにしていた。振り返りの用紙にたくさん絵を描いていた。学生パートナーを含めた4名グループの会話の中で両親や親戚、知り合いのことが話題に上がっていたが、「嫌いな人がいる」等、ネガティブな話題が多かった。

<活動終了時の様子>

- ・持ってきていた本を学生パートナーに見せてくれた。

<第 6 回の活動による子どもの変化>

- ・プラネタリウムは楽しむと思われたが、意外と感想が聞けず、どう感じたかは分からなかった。だが、グループではこれまで以上にいろいろな話をする事ができた。

(第 7 回 12 月 12 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 7 回の活動による変化の仮説

- ・AI に対する関心が強いので前向きに取り組むのではないか。

●第 7 回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

- ・最初、お腹の調子が良くないそうで薬を飲んでいて、シールをたくさん持ってきていて、学生パートナーに色々説明していた。

<活動中の様子>

- ・100 年後について考える中で、駄菓子屋、探偵等になりたいと語っていた。また、「不登校の人にも優しい未来になってほしい」と言っていた。たくさん考えたが実際に AI を触る時間になると公園に変更し、色や形等の細かいところまで詳細に指示を伝えてくれた。生成が思い通りにいかなかった際、AI がどこで間違えてしまったのかを考察していて、深く考えている様子だった。前回、iPad の調子が悪かったり学生パートナーによる話の引き出し方が上手いかなかったため、今回会話をたくさんするようにしたことで納得のいく画像ができた。画像に入りたい花を検索していた。「自分で AI に入力したいな～」と言いながらも「ダメなんだよね」と確認していた。画像の明るさは暗めが好きと言っていた。

<活動終了時の様子>

- ・後方のカメラで Gさんと遊んでいた。

<第7回の活動による子どもの変化>

- ・活動中も AI が好きだと言っており、楽しんで取り組んでいた。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

- ・AI 生成において新たなアイデアがたくさん生まれるのではないか。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・シール帳を持ってきていて、学生パートナーにお気に入りのシールを見せていた。

<活動中の様子>

- ・画像を動画にする作業はとても積極的に取り組んでいた。学生パートナーが文章に悩んだ際に提案した場面もあった。普段は他の子の発表にあまり興味が無さそうだったが、AI を使う活動回はいつもより反応していた。一番楽しかったのはプラネタリウムだったと言っていた。ありがとうの会の時間は iPad で遊ぶのに夢中だった。

<活動終了時の様子>

- ・「あと2回はやりたい」や「次いつ会える？」など名残惜しそうにしていた。

<第8回の活動による子どもの変化>

- ・アイデアがどんどん出てきて文章も一緒に考え、楽しみながら創造的な作品を作成することができた。



第2回 Bさんが学生パートナーと寄せ植えを行う様子



第4回 Bさんが学生パートナーと自己紹介カードを作成する様子



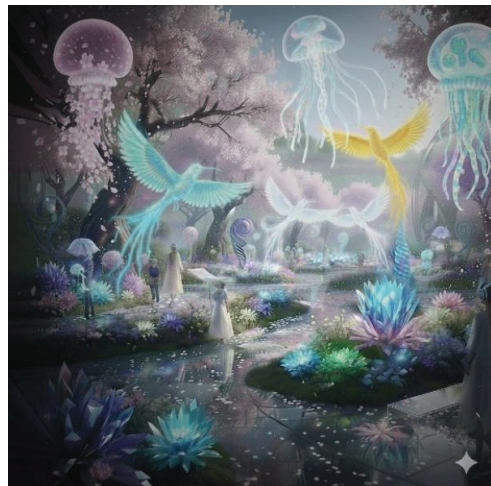
第5回 BさんとGさんがブロック創作に取り組む様子



第5回 BさんがLさんのテーブルへブロックを借りに行く様子



第5回 Bさんの作品「将来住みたい家の庭」



第8回 Bさんの作品「100年後の公園」

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・当初は仲の良い友達と行動することが多く、学生パートナーとは距離があったが、回を重ねる中で会話量が増え、自分の興味や考えを伝える姿が見られるようになった。
- ・絵や植物、AI など好きな分野では集中力と意欲が高く、後半は学生パートナーとの別れに名残惜しさを示すなど学生パートナーと活動への愛着も育っていた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・無理に関わりを広げず、友達との関係や本人のこだわりを尊重した関わりが安心感につながった。
- ・興味のある話題（絵・植物・AI）を深める質問や提案を対話の中で行うことで、自発的な発言やアイデア表出が促され、信頼関係の構築が進んだ。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・仲の良い友達と同じ空間で活動できる配置が安心感につながり、自由に制作・発想できる時間設定が効果的だった。
- ・屋内外の活動や ICT 機器を活用した多様な環境により関心が引き出され、特に AI や創作活動では学生パートナーとの会話の中でイメージが具体化され、集中して取り組める環境が創造性の発揮につながった。

Cさん 小学校高学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・レゴ®ブロックやペーパークラフト等のモノづくりが好き。スターウォーズ等のSF映画、電車、飛行機、ゲームが好き。AIに関心が高い。将来映画監督になりたい。
- ・運動は苦手。
- ・拘りが強い。意思が強く、意にそぐわないことがあると妥協しない。
- ・政治や海外の動向、時事問題にも関心があり、受け止めてくれる大人には、自分から色々な話をする。話題が二転三転するかもしれないが、聞いてあげると打ち解けやすい。
- ・相手の気持ちに立って物事を考えることが苦手。相手の話を聴くばかりだと飽きてしまう。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・最初は緊張を感じて話せないと思うが、徐々に会話回数は増えてくるのではないかな。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・緊張もあつたが仲のいい子ども達とあまり離れようとはしなく、会話も少なかった。

<活動中の様子>

- ・工作は好きなようで積極性が見られた。

<活動終了時の様子>

- ・活動そのものを楽しんでくれた様子で次回にも期待をしていた。

<第1回の活動による子どもの変化>

- ・会話が増えた、特に自分の好きな船やペーパークラフトの話を自分からしてくれるようになった。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30) ★担当学生パートナーが欠席のため記録なし

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

- ・初回終了時点で次回活動を楽しみにしていたため最初から学生パートナーと話をするだろう。だが、屋外活動であるため、やや控えめ、または逆に活発になる可能性があるのではないかと。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・学生パートナーが前回欠席だったことから、「なんで休んだの？」と尋ねた。それだけ楽しみにしていたようだった。今回は学生パートナーが出席していたため安心感や嬉しさが感じられた。

<活動中の様子>

- ・屋外活動があまり好きではなく、植物にもそれほど興味がないということもあり積極性が見られなかった。だが、「一緒にこの時間まで休んで、この時間からやってみようか」という学生パートナーの提案には賛成し、そのように行動した。

<活動終了時の様子>

・あまり興味のある活動ではないと思われたが、アンケートには「楽しかった」や「不満はない」と回答し、学生パートナーに対し、「もう休まないでね」や「またね」と自分から声がけしてくれた。帰り際にハイタッチをし、笑顔が増えた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・外での作業はあまり興味を示さず活発ではなかったが、学生パートナーとの会話や空間は楽しめた様子だった。次回のAIを使う活動は、本人の関心のある内容であるため、より積極性が見られるのではないかと。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・おそらく得意分野であるから、積極性が見られ、自分から行動しようとするのではないかと。会話はどんどんしてくるかもしれない。

●第4回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

・少し眠そうだったり落ち着きがなかった。緊張は感じられなかった

<活動中の様子>

・全体共有の際に本人から、「あれ、すごい」、や「なんだろう」など話題を振ってきた。活動中は積極的に参加して全体共有などもしっかりと見ていた。嫌なことは「嫌」などと言うようになった。

<活動終了時の様子>

・次回を楽しみにしていた。笑顔だった。ただ少し調子は万全そうではなかった。

<第4回の活動による子どもの変化>

・学生パートナーにかなり積極的に話しかけるようになり、良いも悪いなど自分の意見を言えるようになった。自分をかなり出すようになった。

(第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・学生パートナーが欠席のため別の学生パートナーが関わった。最初は緊張して不安もあるかもしれないが、レゴ®ブロックをきっかけに少しは会話もできるのではないか。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・ぐったりしていてあまり目も合わなかった。声も小さくて少し気だるそうだった。

<活動中の様子>

・レゴ®ブロックを作り出すと黙々と進めていた。足りないものは自分で作り、自分のアイデアや発想力を存分に活かして取り組んでいた。

<活動終了時の様子>

・最初とは違ってニコニコしていた。レゴ®ブロックによる創作を楽しんでいたようだった。帰る時は学生パートナーに手も振っていた。

<第5回の活動による子どもの変化>

・途中から活動を楽しんでいた。次回、プラネタリウムを観るのを楽しみにしていた。次回の活動も興味や関心を持って取り組めるのではないか。

(第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・好きな分野のため、かなり積極性が見られるのではないか。

●第7回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

・先生の説明はしっかり聞いており、同じ席の子どもと飲み物が同じでそれについて盛り上がり話をしていた。

<活動中の様子>

・とても積極的に活動に参加していた。AIに指示する際に大変細かく指示をした。AIが指示を聞かなかった時にかなり不満そうであった。

<活動終了時の様子>

・活動自体は楽しめていたが、AIに対して大きな不満を表出していた。

<第7回の活動による子どもの変化>

・学生パートナーとの気まずさもなく良い距離感で交流しながら活動を行うことができた。

・AI動画への再挑戦となるため、次回は積極的に参加してくれるのではないか。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう!」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・発表が苦手なため、活動には積極的に参加するものの、発表は嫌がるのではないか。前回、AI 動画生成が上手いかなかったため、今回少し不機嫌かもしれない。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・すっと席に着き、自分の場所だという自覚を持っている様子だった。4人グループでの自己紹介のときは学生パートナーには積極的に話していたが、他の人に対しては声が小さくなっていた。

<活動中の様子>

・AI 動画生成が上手いかず発表する際に拒んだ。今までは拒むことはなかったため、完成度にはこだわるが、他の人の目はあまり気にしていない様子に見えたが、「恥ずかしい」との発言があり、かなり周囲の目を気にしていた。

<活動終了時の様子>

・「楽しかった」と発言し、活動中に発表できなかった時の不貞腐れのような印象とは変わり、かなり清々しい感じだった。

<第8回の活動による子どもの変化>

・あまり機嫌は良くなく、実際 AI 動画生成も上手いかず発表は拒んだが、自分を出せるようになっていた。飲んでいて飲み物を学生パートナーに紹介したり、アルバムを一緒にみた際にも「これ良かった」、「これは上手いかなかった」などの感想を話していた。



第3回植物図鑑を作る様子



第3回自由行動時間のCさんと学生パートナー



第4回 Cさんが学生パートナーと
AI 画像生成に取り組む様子



第4回 Cさんの作品「10年後の自分」



第5回 Cさんの作品「将来住みたい部屋」庭」



第7回 Cさんが学生パートナーと
AI 画像生成に取り組む様子

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は緊張が強く仲の良い子どもの側で大人しく過ごしていたが、回を重ねる中で学生パートナーとの関係が深まり、会話が増えた。
- ・好きな分野（工作・AI）では特に意欲的で、学生パートナーとの関係の形成に伴い自分の意見や感情を率直に表出できるようになり、最終回では達成感も感じられたようだった。

<活動全体を通じて効果的だった支援方法>

- ・本人の興味関心を起点に関わり、無理に発言や発表を求めず受け止める姿勢が安心感につながった。
- ・提案型の声かけや選択肢を示す支援により意欲が引き出され、否定的感情も含めて受け止めてもらえた経験が自己表現の広がりを支えた。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

- ・室内制作、屋外活動、AI、プラネタリウムなど多様な活動環境と経験と意欲を生起させることに有効だった。
- ・慣れた空間で継続的に活動しつつ、少人数で落ち着いて取り組める配置と関係性が、安心して自分を出せる土台となった。

Dさん 中学生

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・様々な活動に積極的に参加する。
- ・社交性があり、老若男女問わず、誰とでも話することができる。
- ・周りに気を遣いすぎて、疲れてしまうことがある。年下の子どもを優先させてあげることが多いため、自分の話を聴いてもらう機会が少なく、泣いてしまったことがあった。甘えたいが、しっかりしなくてはと思っている。自己抑制的。自分の気持ちを我慢してしまう傾向がある。
- ・絵を描くこと、料理が好き。夏祭りでは和太鼓を演奏している。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

・初回ではあるが、コミュニケーションは得意だと聞いていたため、学生パートナーとの会話は成り立つのではないかと。終わる頃には会話のラリーは何回か続くと思われる。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・緊張している様子。話はするが、話題は学生パートナーからの提供のみ。

<活動中の様子>

・基本的に絵を描くことに集中していたため、あまり会話がなかった。同じ机で絵を描いていたFさんに対しての興味は少しあった。フリースクールのボランティアスタッフとの仲が良かった。

<活動終了時の様子>

・バイバイと手を振る時、学生パートナーと目は合わなかったが、「また来週！」と言っていた。学生パートナーにあだ名をつけ、そのあだ名を何度も使っていた。

<第1回の活動による子どもの変化>

- ・話題を提供するととても楽しそうに話すようになった。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

- ・前回はあまり目が合わなかったが、今回は目を合わせてより自分の話をしてくれるのではないか。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・名前(あだ名)も前回の会話も覚えていて学生パートナーとの会話が弾んだ。「1週間ぶり！」と言った感じで明るく接していた。

<活動中の様子>

- ・好きな色の話や、紙粘土にハマったことを話し、前回より多くのことを話した。他の子どもに対しての興味よりも、自分のセンスをどう活かすかに集中し、作品に取り組んでいた。フリースクールのボランティアスタッフとの仲がとても良く、そちらと話している場面が多かった。

<活動終了時の様子>

- ・学生パートナーに対しかなり心を開いているように見えた。Dさんの目線で物事をより深く考えることを意識すると、Dさんも接しやすいかもしれない。

<第2回の活動による子どもの変化>

- ・物理的にも言葉遣い的にも、学生パートナーとの距離が近くなった。学生パートナーと子どもと言うよりも、友達の感覚に近いかもしれない。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・遊具などの場合、他の子ども達がいると遠慮してしまうのではないか。終わり頃には、他の子どもの様子を見ながら、自分の遊びたいことをできるようになるのではないか。

●第3回の活動による様子と変化（ラポにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・学生パートナーとのボディータッチが増えた。初めから手を繋いだり、対面してからずっと会話を続けていた。

<活動中の様子>

・他の来園者のご夫婦に席を直ぐに譲っていた。周りをよく見て行動することに長けている。

<活動終了時の様子>

・「楽しかった！」と何度も言っていた。思ったよりも自分のしたいことをたくさんしていて、満足していた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・屋外で開放感のある設定であったため、本来のDさんの雰囲気を出すことができた。最初から自分のしたいことを取り入れてのびのびと遊ぶことができた。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・担当する学生パートナーとは別の学生パートナーが担当したため少し緊張すると思うが、活動をしていく中で楽しく関わられるかもしれない。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・学生パートナーが欠席で、少し寂しそうだった。

<活動中の様子>

・AI画像生成がうまくいったのか、喜んでいた。

<活動終了時の様子>

・活動開始前よりも緊張が解れ、学生パートナーに帰り際には「またね」と手を振っていた。

<第4回の活動による子どもの変化>

・活動の中で会話が広がっていったことで緊張や不安よりも楽しさ、嬉しさを感じていたようだった。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・前回、担当する学生パートナーが欠席してしまったため、緊張すると思われるが、だんだん元の雰囲気に戻るのではないかな。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・前々回の国営昭和記念公園と変わらないテンション感と雰囲気で学生パートナーに接していた。

<活動中の様子>

- ・「うちら仲良いじゃん？だからうちだけでいいからさ、変顔してもいい？」と言い一緒に変顔をした。

<活動終了時の様子>

- ・前々回に引き続き、「また来週」と言い、次回が楽しみな様子だった。

<第5回の活動による子どもの変化>

- ・前々回に引き続き、「また来週」と言ってくれて、次回がお互い楽しみだと感じる事ができた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

- ・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-13 コニカミノルタサイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

- ・楽しみにしていると思うが、前回から眠くなりそうと話していたので眠気によって感想の時はあまり話が弾まないのではないか。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・手を振りながら「おはよう！」と言っていた。前回と変わらない。

<活動中の様子>

- ・プラネタリウム中は数回あくびをしていたが、きちんと見ていて、終わりには「ドラマみたいだった」と話した。

<活動終了時の様子>

- ・天体の話を多くできて、学びに繋がったとアンケートに書いていた。「あと2回しか会えないよね」と言い、残りの2回でより深い関わりができると良い。

<第6回の活動による子どもの変化>

- ・テンション感が伝わるようになった。話をする時明るかった。眠気は関係がなかった。

(第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・前回と変わらずに接すると思うが、最終回に近いため、少し気まずさもあるかもしれない。

●第7回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

・特に何も前回と変わらず、洋服や髪型を学生パートナーと褒めあっていた。

<活動中の様子>

・自分から話しかけ、将来どんなことをしたいか、学生パートナーとたくさん話した。途中お互いの名前やイラストを描いたりして遊んでいた。

<活動終了時の様子>

・「もうあと一回しかないね」と学生パートナーとお互いに言い合って、「また来週」と言い部屋を出た。

<第7回の活動による子どもの変化>

・次回ははいよいよ最終回であるため、より多くのことを話すのではないかな。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう!」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・最終日であるため、すこし気分が落ちてしまっていると思うが、だんだん明るくなるのではないかと。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・以前学生パートナーと話したことのある、紫色のカーディガンを着てきていた。開始から「みてみてー」といながら見せていた。特に緊張はなかった。

<活動中の様子>

・度々「今日で最後なのが悲しい」と言っていた。かなり心を開いており、AI動画生成では、入力を学生パートナーに全て任せ、発表する時のメモまで任せていた。発表前には、隣にいたFさんにも話しかけていたり、スライドを見て「かわいい」と言ったり笑ったりして、他の子どもにも興味を持っている姿を見ることができた。

<活動終了時の様子>

・学生パートナーとお揃いのヘアピンやヘアクリップを渡してくれたり、Dさんが作ったレゴ®ブロックのペンギンを渡してくれた。このペンギンを自分だと思って、学生パートナーを慰めるような優しい一面が見られた。「手紙も一生懸命書いたんだよ」と言って渡した。

<第8回の活動による子どもの変化>

・活動が終了して、悲しい雰囲気が終わるかと思ったが、明るく、「お互い元気で」と別れることができた。



第2回Dさんが寄せ植え作品を発表する様子



第2回Dさんの寄せ植え作品
「将来住みたい家の庭」



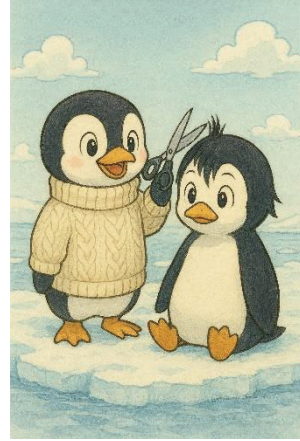
第 5 回 D さんがブロック創作を行う様子



第 5 回 D さんの作品「将来住みたい部屋」



第 7 回 D さんと学生パートナーが
100 年後の美容室の構想を練る様子



第 4 回 D さんの AI 画像作品
「将来になりたい自分」

● 全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は緊張が見られたが、回を重ねるごとに学生パートナーとの信頼関係が深まり、会話量や距離感が近づいた。
- ・屋内外の活動を通して自分のしたいことを表現できるようになり、最終回では別れを惜しみつつも前向きに気持ちを伝える姿が見られた。
- ・学生パートナーが「聞く姿勢」を示したことで、自己表現ができるようになった。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・自己表現を促すのではなく、安心して話せる環境を整えた。

- ・話題提供や質問、共感を重ねることで会話のラリーが生まれ、自主性を尊重した関わりが信頼関係の構築を促した。

- ・「優しいからこそ傷つきやすい」という特性への理解が大切な関わりになった。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

- ・慣れた室内環境に加え、屋外やプラネタリウムなど変化のある活動設定がDさんの本来の姿を引き出した。

- ・少人数で落ち着いて関わられる配置と、自由に表現できる環境が、安心して人と関わる土台となった。

Eさん 小学校中学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・内気な性格でおとなしい。自分から話すことが少ない。
- ・言葉や文章で表現すること、人前で発表することが苦手。言語化が苦手なため、オープンな問いかけより、選択肢から選んでもらう質問のほうが答えやすい。
- ・初めての場所には母親同伴でなければ不安になる。フリースクールにも母親同伴で通所している。
- ・環境に左右されやすい。周りに合わせてしまい、傷つきやすい。身の回りのことを我慢しがち。フラストレーションを溜めて家で爆発することがある。
- ・運動全般、特に水泳が好き。県外の水泳大会に出場した経験あり。カードゲームやゲームが好き。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・内気な印象で、最初はあまり反応がなく次第に話ができるかもしれない。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・同じフリースクールの友達と一緒にテーブルに座ってたため、若干場所が狭くなっていた。友達の様子が気になっていたようだった。また、パートナーが工作するよと伝え、あまり工作好きじゃないと答えたため、乗り気ではない様子だった。

＜活動中の様子＞

・同じフリースクールの友達は糸電話を作ったので、それから刺激を受けたかのか、いろんな素材を使って糸電話を作っていた。真ん中のテーブルの色々な素材を取りに行くことを、最初は遠慮していたが、励ましの声かけをしてみたり、「一緒に行こうよ」と誘ってみたりすると、自分の考えをどんどん作品へ表出することができた。

<活動終了時の様子>

・最初は「あまり工作は好きじゃない」と言ったが、実は粘土は好きで、学生パートナーから色々質問をすると、自分で答えられない時はフリースクールのフタッフを何回も呼び、代わりに答えてもらったり、粘土の写真を見せたり、「アクリル粘土ではよくいろんなものを作っている」という話もした。

<第1回の活動による子どもの変化>

・自ら話をすることは多くなかったが、聞かれたことはしっかり返答していた。最初はあまり興味を示さなかった工作も、真ん中のテーブルにあった様々な素材に対して興味湧いてきて、自分の考え（疑問）に基づき、どんどん行動できた。他の子どもの作品に対しても興味を持って発表の写真と一緒に見ることができた。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

・最初はあまり興味をもたないかもしれないが、少しずつ興味をもって活動に取り組めるかもしれない。

●第2回の活動による様子と変化（ラポにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・少ししか興味を持っていなかった。

<活動中の様子>

・自分が作りたいものが段々と明確になってきて、活動にとりくめるようになった。

<活動終了時の様子>

・興味をもって活動に取り組むことができた。

<第2回の活動による子どもの変化>

・興味をもって活動に取り組めた。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・花に興味は持ちづらいが、自由時間は興味があるかもしれない。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・少し緊張している感じが伝わった。

<活動中の様子>

・花の観察では、学生パートナーが「これはどう？」と言って写真を撮る感じだった。花をアプリで調べることは自分から積極的にできていた。自由時間は一番楽しそうに遊んでいた。

<活動終了時の様子>

・緊張がほぐれて活動に参加できていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・仮説通り、花にはあまり興味がなかったが、友達と協力することで少し興味を持っていた。自由時間は楽しく遊んでいた。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2-8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・ゲームが好きと初回で言ってたため、今回、AIについてはとても興味を持って取り組めるのではないかな。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・前回よりも学生パートナーと距離感が近くなっていた。Chat GPTに興味関心があった。

<活動中の様子>

・作りたいものがしっかり自分の中であったので、スムーズに活動に取り組むことが出来ていた。AIに興味をもち、集中力が持続されていた。

<活動終了時の様子>

・最後まで楽しく活動に参加できていて、満足感のある感じだった。

<第4回の活動による子どもの変化>

・仮説通り、興味関心をもって楽しんで活動に取り組んでいた。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・最初は緊張していると思うが、楽しく活動できるようになるのではないかな。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・2週間ぶりであったこと、席替えでグループが変わったことにより、少し緊張していた様子だった。

<活動中の様子>

・全体共有の際に、自分から発表できた。

<活動終了時の様子>

- ・最初に比べて表情が柔らかくなり、とても楽しみながら活動に取り組んでいた。

<第 5 回の活動による子どもの変化>

- ・仮説通り、最初は緊張していたが最後は緊張も和らぎ、とても楽しそうに活動に取り組んでいた。

(第 6 回 12 月 5 日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町 9-1 3 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町 3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第 6 回の活動による変化の仮説

- ・あまり興味を持たないままで終わるのではないか。

●第 6 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・眠そうだった。

<活動中の様子>

- ・興味を持ちながらプラネタリウムを見ることができていた。

<活動終了時の様子>

- ・眠そうだった。

<第 6 回の活動による子どもの変化>

- ・興味を持たないと思ったが、意外と関心を寄せながら活動に参加していた。

(第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・初対面の学生とパートナーを組むため、最初は慣れないかもしれないが、活動を通して会話が増えていくかもしれない。

●第7回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・Eさんの名前を呼ぶとこちらを振り向き、学生パートナーが名乗ると名札の方を見ていた。その後話しかけたが、学生パートナーの声が聞こえなかったのか、関心がないのか、反応はなかった。しかし、好きなもの等、質問には答えていた。

<活動中の様子>

・AIに生成させたい画像のプロンプトを考えている際、Eさんからプロンプトの内容を提案してくれた。

<活動終了時の様子>

・終了後、別のテーブルにいた他の子どもがEさんの方に来て、Eさんもその子どもに近寄り、話している様子があった。

<第7回の活動による子どもの変化>

・動画制作時には、できたものに対して少し感情を表現する様子が見られた。また、Eさんがプロンプトを言ったり、キャラクターの画像を担当者に見せてイメージを伝えようとしたりと、一緒に活動を進めようとしているように見えた。また、同じテーブルにいた他の子どものメモやiPadを少し見る瞬間があった。関わりはしなかったものの、活動を通して他者への関心やコミュニケーションが増えていくのではないかと。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう!」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・最初はアイデアが思い浮かぶのに時間がかかりそうだが、どんどん楽しく参加できるようになるのではない
か。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・眠そうだった。

<活動中の様子>

・動画制作に興味を持って参加できていた。

<活動終了時の様子>

・全ての活動が終わり、とても達成感を感じていた様子だった。

<第8回の活動による子どもの変化>

・この活動全体に達成感を感じているように見えた。



第5回 Eさんが学生パートナーと作品を発表する様子



第5回 Eさんの作品「将来住みたい部屋」



第 4 回 Eさんが学生パートナーと
自己紹介カードを作成する様子



第 5 回 Eさんが学生パートナーと
ブロック創作を行う様子



第 7 回 Eさんの作品「未来都市東京」



第 8 回 Eさんが学生パートナーと
アルバムを観ながら活動を振り返る様子

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動全体を通じた様子と前後の変化>

- ・当初は内気で反応が少なく、活動や他者への関心も限定的だったが、回を重ねる中で興味のある分野では主体的に行動できるようになった。
- ・工作や AI、動画制作では集中して取り組み、後半は自分からの発言も見られ、最終回には達成感をもって活動を終えることができた。

<活動全体を通じて効果的だった支援方法>

- ・無理に関わりを持つとせず、周りを見ること、励ましや「一緒にやろう」と寄り添う声かけが安心感につながった。
- ・本人の興味や得意分野を手がかりに質問をすることで、自発的な発言や行動が引き出され、徐々に他者との関わりも広がっていった。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

- ・多様な材料が自由に使える制作環境や、周囲に友達がいる環境により、他の子どもの作品を見ながら創作意欲が触発されたようだった。
- ・友達の存在や本人のペースで進められる環境が主体的な活動を支えた。

Fさん 小学校高学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・礼儀正しく、自分の意思や意見をしっかり持っている。小学校入学以降、保育園とのギャップを感じ、疑問を抱いていたが、自分なりの解に到達し、自分の意思で学校に行かなくなった。
- ・考え方が大人っぽく、大人とも対等に話することができる。同年代とも楽しく会話できる。
- ・自分の意見を押し付けてくる人が苦手。一方的に話すより、本人の考えや意見を引き出すような会話が適している。
- ・母親同伴でなければ不安が強い。フリースクールにも母親同伴で通所している。
- ・水泳、魚の調理、ゲームが好き。魚釣りをする。包丁で魚をさばくことができる。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）担当学生パートナーの欠席により記録なし。

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

（第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「自然に触れる②」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

- ・学生パートナーと今回初めて関わるため、まだ自分を出さないのではないか。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・花や植物にはそこまで興味を示していなかった。花や植物を選ぶところが混んでいたため、「空いてから行こう」と言っていた。

＜活動中の様子＞

・紙粘土に絵の具で色をつけてデコレーションするのを楽しんでいた。

＜活動終了時の様子＞

・他の子どもたちと合流して話していた。少し緊張した状態での活動が終わって緊張が解け一安心したように見えた。

＜第2回の活動による子どもの変化＞

・やや緊張した状態ではあったが、自分の興味のあることや話題に楽しく関わっていた。今後、フリースクールの他の子どもや他の学生との関わりが増えるとよい。

（第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「自然に触れる②」

＜実施場所＞

・実施場所②〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・活動場所が外であるため、屋内とはまた違った姿や行動を見ることができるかもしれない。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・前回学生パートナーと一緒に話した内容を覚えていた。しかし、近くに信頼のできる大人がいると、その方々と話すのに夢中であった。

＜活動中の様子＞

・花には興味がないようだった。しかし面白い形や色の植物には興味を示していた。白いトランポリンでの遊びが非常に楽しそうだった。

<活動終了時の様子>

- ・「楽しかった」という前向きな気持ちのまま、「また来週」と学生パートナーに手を振っていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

- ・屋内での活動よりも少し楽しそうだった。他の子どもとの関わりが見られた。

(第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

- ・元気に部屋に入ってきたため、今日の活動を楽しみに来てくれたのではないか。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・席替えをしたが、自分から初対面の人にも自己紹介をしていた。

<活動中の様子>

- ・とても楽しそうだった。特に車を作っている時に弟と楽しそうに話しながら作っていた。

<活動終了時の様子>

- ・インタビューが最後であったため、緊張がまだ解けていないようだった。

<第5回の活動による子どもの変化>

- ・自分にとって好きなことであれば、気分が高い状態で楽しく活動に取り組むことができた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-13 コニカミルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・いつもとは違う場所での活動なので、少し緊張しつつも期待を持って活動に参加する。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・元気そうではあったが、活動に対する楽しみ、期待のためかどうかはよくわからなかった。

<活動中の様子>

・星座が沢山現れたり、急に暗くなったり、爆発したりするシーンでよく反応していたので、活動を楽しんでくれているのではないかと考える。

<活動終了時の様子>

・宇宙を知るといふ、いつもとは違う体験だったためか、グループでの感想共有では活動開始時よりも反応が良く、他の子どもとの関わりも見られた。

<第6回の活動による子どもの変化>

・次回の活動への期待をいつも以上に示していた。活動参加の満足度が次回につながるのではないかと考える。

（第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・自分の興味のある内容のため、期待や関心を持って活動に参加しようとするのではないかと考える。

●第7回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・初めはテーマをどうしようかと悩んでいたが、決めてからはさくさくと言葉が浮かび、プロンプトをうまく作ることができた。

＜活動中の様子＞

・プロンプト作成に苦戦はしたものの、最終的に自分が納得のいく画像を生成できたようで、それを動画にすることができずに残念そうにしていた。

＜活動終了時の様子＞

・来週は発表ということもあって「少し緊張する」と言葉にしていた。

＜第7回の活動による子どもの変化＞

・次回は自分の画像が動くことを期待している様子だった。

（第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「発表会 未来都市に行こう！」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・最後の活動ではあるが、元気に取り組んでくれるだろう。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・先週のことを思い出し、「今日こそは動画作りを成功させよう」と意気込んでいた。

＜活動中の様子＞

・やはり動画作成が上手くはいかなかったものの、「これでも十分いい」と発表に向けて準備しようとしていた。

<活動終了時の様子>

・今までは席で挨拶をしたらそれで終わりだったが、今日は名残惜しくなってくれたのか、帰り際に何度も手を振ってくれた。

<第 8 回の活動による子どもの変化>

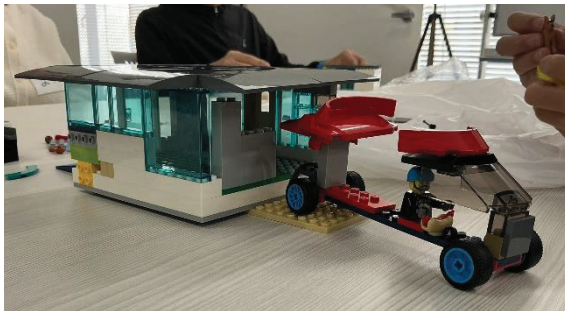
・最後まで楽しく元気に明るく活動に取り組むことができた。



第 2 回 F さんが学生パートナーと寄せ植えを行う様子



第 5 回席替え後
Kさんと自己紹介をする Fさん



第 5 回 F さんの作品「将来住みたい家」



第 6 回 F さんが K さんに格闘技
のカードを見せる様子



第 7 回 F さんの作品「100 年後の格闘技」



第7回 Fさんが学生パートナーと
AI 画像生成に取り組む様子



第8回 Fさんが学生パートナーと活動を振り返る様子

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は緊張が見られ自分をあまり出せなかったが、活動を重ねる中で興味のある内容には意欲的に参加する姿が増えた。
- ・屋外活動や制作、AI 体験を通して表情や反応が豊かになり、他の子どもとの関わりや自己表現も広がった。最終回では名残惜しさを示し、学生パートナーとの関わりや活動への思いが感じられた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・本人の興味やペースを尊重し、見守る姿勢で関わったことが安心感につながった。
- ・好きな活動では挑戦を後押しし、うまくいかない場面でも受容的に関わることで、前向きに取り組む姿勢や次への期待を引き出すことができた。
- ・先生方との既存の信頼関係を活かしながら、学生パートナーとの新しい関係を構築した。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・屋内外やプラネタリウムなど多様な活動環境が意欲を高めた。
- ・少人数で落ち着いて取り組める環境により安心して活動でき、創作や発表への参加を支えた。

Gさん 小学校中学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・絵を描くこと、ダンスが好き。
- ・場面緘黙があり、人と話すことが苦手。家族や特定の友達（Bさん）とは話すことができるが、他の人との会話は難しい。フリースクールでも、周囲の大人とBさんを介してコミュニケーションをとっている。
- ・自己表現、意思表示が苦手。通所開始後数か月経って、首を振るなど、身振りで意思表示するようになった。
- ・環境に左右されやすい。ひとりで初めての場所、体験に参加することは難しい。初対面の人が苦手。
- ・自由さへの戸惑いがある。自分で決定することが難しい。質問に答えられず、硬直してしまうことがある。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

・最初は、学生パートナーが横にいることが気になり、緊張するだろうが、活動を続けるうちに、学生パートナーの存在にも慣れてくれるかもしれない。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・自己紹介をする際に、隣にいた友達に「助けてー」と言っていた。緊張している様子だった。

＜活動中の様子＞

・絵を描いている時に使おうとした絵の具セットにパレットが付いていなかったため、自分で工夫して厚紙をパレット代わりにしていた。

＜活動終了時の様子＞

・絵の具の片付けを手伝っていた。

<第 1 回の活動による子どもの変化>

- ・活動の後半では、学生パートナーが横にいても隣の友達と普通の大きさの声で会話していた。

(第 2 回 10 月 31 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 2 回の活動による変化の仮説

- ・まだ 2 回目の活動なので、最初は緊張すると思うが、活動を続けていくうちに緊張がほぐれ、活動を楽しめるようになるかもしれない。

●第 2 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・少し緊張している様子で、自己紹介の時には、自己紹介をしないで Bさんと小声で会話していた。

<活動中の様子>

- ・粘土の色を工夫しながら、何度も本物の花と色を見比べながら丁寧に作業を進めていたのが印象に残った。

<活動終了時の様子>

- ・振り返りのアンケートを答える際に、学生パートナーの様子が気になるようで、少し書きにくそうにしていた。

<第 2 回の活動による子どもの変化>

- ・最初は緊張していたが、作業を進めるうちに、作業に没頭し、Bさんと会話をしながら積極的に活動に参加していた。

(第 4 回 11 月 14 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・活動を続けるにつれだんだんとリラックスして楽しみながら活動に取り組めるようになるかもしれない。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・前回の活動を欠席していたこともあるのか、緊張している様子だった。

<活動中の様子>

・AIの画像生成に時間がかかっていたときに、お祈りをしながら待っていた。

<活動終了時の様子>

・楽しかったようで、満足している様子だった。

<第4回の活動による子どもの変化>

・仮説の通り、だんだんと盛り上がり、楽しそうにしていた。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・前回までの活動ではBさん以外の子どもとの関わりが見られなかったが、今回は他のグループとパーツを交換する機会があるため、他のグループの子どもとの関わりが見られるかもしれない。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・開始前から楽しそうな様子で、作業を開始するとすぐにレゴ®ブロックを手にとり作業に取り組んでいた。

＜活動中の様子＞

・Bさんとレゴ®ブロックの人形のパーツを巡って軽く揉めかけたが、最終的にはお互いに譲り合い、パーツを半分ずつ分けて使っていた。

＜活動終了時の様子＞

・振り返りの時間に、レゴ®ブロックで使ったペットを並べて遊んでいた。活動が終了し部屋から出た後も、Bさんと一緒に後ろのドアから作品を覗きに来ていた。

＜第5回の活動による子どもの変化＞

・他のグループの子どもと直接関わることはなかったが、他のテーブルにパーツを貰いに行く際に、Bさんについていき、Gさん、Bさんそれぞれの学生パートナーがパーツをもらう様子を見ていた。

（第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30）

＜活動タイトル＞

「創造する②」

＜実施場所＞

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-1-3 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・今回は初めて普段の会場以外での活動となるため、空間が広く、室内よりも伸び伸びと活動することができるかもしれない。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・プラネタリウムを楽しみにしている様子だった。

<活動中の様子>

・プラネタリウムで土星を見たことを話し、土星のキャラクターを考えて、振り返りシートの裏に描いていた。

<活動終了時の様子>

・振り返りが終わった後に、紙の裏に絵を描いたり、帰る時に猫の真似をしたりと、とても楽しんでいる様子だった。

<第 6 回の活動による子どもの変化>

・活動の振り返りをグループで行っている際、普段の会場より別のテーブルとの間隔が広がったこともあり、リラックスした様子で、グループでの会話を楽しんでいた。

(第 7 回 12 月 12 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

● 第 7 回の活動による変化の仮説

・AI を使って自分の想像をイラストとして形にすることで、未来について考え、アイデアを広げられるようになるかもしれない。

● 第 7 回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

・AI の活動があまり楽しみではない様子だった。

<活動中の様子>

・AI でイラストを生成する前に、紙に設計図のような絵を描き、配置や形を細かく考えている姿が印象に残った。

<活動終了時の様子>

・活動をとても楽しんでいて、時間が足りないのを残念そうにしていた。

<第7回の活動による子どもの変化>

- ・AIのイラストを修正したり、細部を考えたりしながら、アイデアを膨らませることができた。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

- ・前回の活動に意欲的に参加してくれたので、今回の活動は、前回より楽しみながら積極的に参加するかもしれない。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・緊張せず、リラックスした様子でBさんと話していた。

<活動中の様子>

- ・AIで動画を生成するときに、なかなか思い通りに作ることができず残念がっていたが、次の動画制作に向けて、改善点のアイデアを出していた。

<活動終了時の様子>

- ・「活動をもっとやりたかった」と言い、活動が終わるのを残念そうにしていた。

<第8回の活動による子どもの変化>

- ・楽しそうに積極的に活動に参加していて、前回の活動では他の子どもの発表には興味を持っていない様子だったが、今回の活動では興味を持ちながら聞いていた。



第2回 Gさんの作品
「将来住みたい家の庭」



第4回 Gさんの
作品「今の自分」



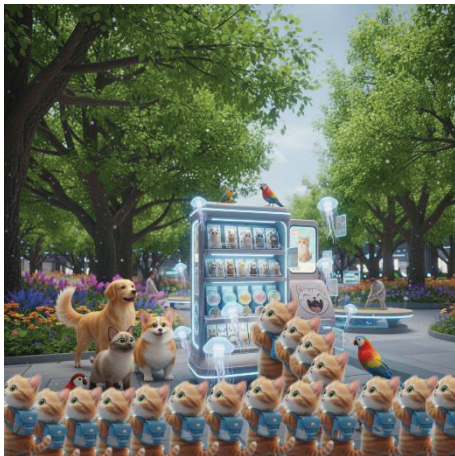
第5回 GさんとBさんが他のテーブルへ
ブロックを借りに行く様子



第7回 AI 画像生成がうまくいこう
にお祈りする GさんとBさん



第6回グループでプラネタリウムの感想を共有する様子



第7回 Gさんの作品「100年後のシール販売機」



第7回 Gさんが学生パートナーと
100年後の東京の構想を練る様子

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は学生パートナーの存在を気にして緊張していたが、創作に集中する中で徐々に安心し、自然な会話や行動が増えた。
- ・回を重ねるごとに発想力や主体性が高まり、後半は AI 活動にも意欲的に取り組み、他の子どもの発表にも関心を示すなど視野の広がりが見られた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・無理に関わりを促さず、制作や発想を尊重して見守る姿勢が安心感につながった。
- ・困った場面ではさりげなく支援し、工夫や努力を認める声かけを行うことで、自信を持って取り組み続ける姿勢を引き出すことができた。
- ・先入観を持たず、継続的に関わることで子どもを理解できた。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・仲良しの二人組を最後まで同じグループにしたこと、プラネタリウムなどの変化のある空間が新たな刺激となりリラックスした参加を促した。
- ・受け止めてくれる学生パートナーの存在と、仲良しの友達、自由に描いたり考えたりできる時間と空間が、想像力や集中力の生起を促す環境となっていた。

Hさん 小学校高学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・いろいろなことに興味を持ち、積極的に挑戦する。算数、理科、社会、体育が得意。鉄道、バス、三国志、世の中のこと、お笑いが好き。
- ・人との関わり合いを好む。大人でも緊張せずに会話でき、小さい子どもの面倒見もよい。同年代の子どもには強がってしまい、強い口調で発言してしまう。
- ・自分が楽しくなってしまうと周囲の気持ちに気づけない。自分のやりたいことが最優先になっしまい、周りが見えなくなることが多い。自分の抑制が難しく、トラブルになることもあり、少々生き辛さを抱えている。順位を決めるようなものでなければ、トラブルにはなりにくい。
- ・独自解釈で行動する場面が多い。返事はよいが課題を理解していないことがあり、回答内容がずれていることが多い。
- ・手先が不器用で細かい作業が苦手。書字に苦手意識がある。騒がしい空間が嫌い。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・最初は緊張していると思うが、回を重ねるにつれて学生パートナーと話せるようになるのではないかな。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

- ・それほど緊張していなかったように見えたが、最初はあまり笑顔もない感じだった。何をするのかよくわからなくて少し不安げな気持ちもあったのかもしれない。

＜活動中の様子＞

- ・作ると決めたテーマに対して最後まで集中を切らすことなく取り組んでいた。時間いっぱい自分が納得する形になるまで様々な工夫をこらして作品を作っていた。

<活動終了時の様子>

- ・作品が作り終わるとさっと準備をして少し挨拶をする程度ですぐ帰った。

<第1回の活動による子どもの変化>

- ・何をするか決まると自分から話しかけてくれたり、作品に対しての説明をしてくれた。学生パートナーとは初対面だったが話すことはできて、最初より打ち解けることができたようだった。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

- ・最初はそんなに会話もなくまだ自由に話せる感じではないかもしれないが、最後の方には前回よりもたくさん話せるのではないかな。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・植物に詳しく何回か寄せ植えをやったことがあると話していた。緊張はしてないように見え、会った瞬間から話し始めていた。

<活動中の様子>

- ・ハーブ系に興味があり、リングをイメージするような工夫をたくさんしていた。今回は「あなたもやりなさい」と言って折り紙を渡してくれて一緒に作る場面もあった。

<活動終了時の様子>

- ・自分の作品に満足したようで写真の撮り方にもこだわりを持って学生パートナーに説明していた。

<第2回の活動による子どもの変化>

- ・植物に詳しいということをはじめて知り、新たな一面が見えた。前回よりも最初からたくさん話すことができた。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・最初は少し大人しい感じかもしれないが、広場や遊具で遊ぶ時には元気いっぱいかもしれない。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・あまり学生パートナーと話さず、他の仲の良い子どもと楽しそうに話していた。

<活動中の様子>

・前回のように入花を撮影する時には撮って欲しい角度を伝えてくれた。好きな三国志を絡めて植物図鑑を作成していた。自由時間には楽しそうに全力で走って逃走中で遊んだ。どンドン前に進んで歩いていた。

<活動終了時の様子>

・今まで通り、帰る準備は早いですが、今回は今までより面と向かってお別れの挨拶をしてくれた。帰る時も他の子どもと話しながら楽しそうにしていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・外に出るとより自由でのびのびとしていたように感じた。「国営昭和記念公園に行くのはそれほど楽しみではない」と言っていたが、他の子どもと遊ぶことができ、楽しそうにしていた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-1 3 コニカミノルタサイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・学生パートナーに代わって別の学生パートナーが担当となり、プラネタリウムで話す機会も少ないため、あまり話は出来ないのではないか。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・友達とずっと話していて学生パートナーとはあまり関わろうとしなかった。

<活動中の様子>

・興味関心はあまりないとのことだったが、活動が始まると参加していた。その場の勢いで行動や発言をしているように見えた。

<活動終了時の様子>

・フリースクールの先生や友達のところに行くまでの行動が早く、その人たちが好きな様子が見えた。会話をするとより、勢いでふざけたり喋ったりしているように見えた。

<第6回の活動による子どもの変化>

・活動前は距離を感じたが、活動時には学生パートナーに話しかけコミュニケーションを取ることができた。ただ感想共有などの場面では全く関心を示していなかった。

（第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・最初はAIに対してどのように説明したらいいのか、自分の理想の画像を作るためにどのような工夫をしたらよいかかわからないかもしれないが、先生の説明などを受けて自分なりに作ることができるのではないか。

●第7回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・学生パートナーと会った時から前日あった出来事の話をするなど緊張感もなくいろいろな話をしていた。

＜活動中の様子＞

・作品を作ることに熱中していて自分から積極的に取り組んでいた。

＜活動終了時の様子＞

・動画が作れなかったことに対して少し不満がある様子だった。

＜第7回の活動による子どもの変化＞

・今回の活動を通してAIの使い方などを学ぶことができた。次回からも意欲的にもっと理想の作品に近づけるとのではないかな。

（第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「発表会 未来都市に行こう！」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・前回動画がうまく作れなかったため、少し不満が残つつ最後には達成感や嬉しさを感じるようになるのではないかな。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・会った時から学生パートナーにいろいろな話をした。リラックスした雰囲気でも不安や緊張などはまったく感じられなかった。

＜活動中の様子＞

・AI動画生成に熱心に取り組んでいた。会話しながら最後まで集中を切らすことなく作品を作っていた。

<活動終了時の様子>

・動画や画像を完成できた嬉しさを表情から感じられた。今回が最後だったが、感謝のメッセージと新体操の招待状を学生パートナーに渡し、振り返りのアンケートの時に、「俺たちは最後じゃないけどね」と言っていた。

<第 8 回の活動による子どもの変化>

・作品を完成させることができた達成感が感じられた。AI の扱い方などを学んだことで、これからも意欲的に様々な活動に取り組めるのではないか。



第 2 回 H さんが学生パートナーと振り返りシートに入力する様子



第 2 回 H さんの作品「将来住みたい家の庭」



第 3 回 H さんが他の子供たち、学生パートナーとドロケイで遊ぶ様子（自由行動）



第 7 回 H さんが学生パートナーと
未来都市東京の構想を練る様子



第 8 回学生パートナーと AI 動画生成に取り組む様子



第 8 回 H さんが学生パートナーと作品を発表する様子



第 8 回 H さんの作品「100 年後の水族館」

● 全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は表情が硬かったが、活動内容が明確になると集中力を発揮し、自ら説明や提案を行うようになった。
- ・回を重ねるごとに学生パートナーとの会話も自然に増え、屋外や AI 活動ではのびのびと自己表現する姿が見られ、最終回には達成感と感謝を言葉で示していた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・本人の興味や得意分野を尊重し、制作に集中できるような受容的な関わりが有効だった。
- ・必要な場面で声かけや説明を行い、工夫やこだわりを肯定的に受け止めることで、意欲的な取り組みと対話を引き出すことができた。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

- ・公園やプラネタリウムなど開放的な空間では特に活発さが引き出された。
- ・落ち着いて作品に向き合える環境と学生パートナーの受容的な関わりが効果的であった。

Iさん 小学校高学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・初めての場所に慣れるまでに時間を要する。自分の興味関心のあるものが間にあれば慣れるのは早い。話しかけには応じ、仲良くなれば自分からどんどん話してくれる。
- ・モノづくり説明書を見ながら作ることができる。ゲームが好き。生物が好きで、将来獣医になりたい。
- ・自由さに戸惑いがある。自由な創作だと何をしてもよいかわからないことが多い。
- ・年下の子どもの面倒を見るのが得意。
- ・他者に過剰に関わる傾向があり、他の人へ物をあげる場面が多くみられる。
- ・模範的な行動に反する人に苦手意識がある。自分が怒られる、注意されること、周囲で誰かが怒られている姿を目にすることを好まない。一度そのような形で気持ちが落ち込むと、気持ちが戻るまでに時間を要する。
- ・書字が苦手。マルチタスクや先の見通しをつけることが苦手。
- ・注意散漫で、危機認知がやや低い。遠足や移動時に、スタッフに声をかけずトイレに行ったり、自販機に買いに行ったりするなど、自由行動が多い。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・最初はあまり話してくれないかもしれないが、工作を通して少し話してくれるようになるかもしれない。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・あまり目が合わない。話してはくれるが、すぐに終わってしまう。

<活動中の様子>

・工作は楽しそうに行っていた。ポンドで目玉おやじを作った際は、感触を共有しようと「触ってみて」と声をかけてくれた。

<活動終了時の様子>

・最後までよく話してくれていた。「次回が楽しみだ」と話し、友達と話しながら帰った。

<第1回の活動による子どもの変化>

・あまり話さないような印象だったが、最後にはよく目を合わせて趣味のことなどを学生パートナーに沢山話するようになった。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

・前回楽しみにしていたため、楽しんで活動を行うだろう。また、前回と同様に様々なことを話してくれるかもしれない。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・植物を見るとすぐに植える植物を決め、いろいろと考えていた。

<活動中の様子>

・植物の根の生え方や日光、水の環境など、色々と考えながら植えたい植物と一緒に植える植物を決めていたことが印象的だった。

<活動終了時の様子>

・前回「使いたかった」と言っていた粘土を使って複数のモチーフを作り、植物の葉の上に乗せて植物と粘土を合わせた作品を生み出しており、独創的で興味深かった。

<第2回の活動による子どもの変化>

・知っている植物について話したり、前回同様、趣味のことを学生パートナーに沢山話した。趣味だけでなく、自分自身の性格なども話した。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・室内よりも刺激の多い屋外でたくさんの刺激を受けて会話が増えたり、様々な一面が見られる。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・「逃走中をやりたい」と同じスクールの友達と楽しそうに話していた。

<活動中の様子>

・植物図鑑の活動には興味はなさそうだったが、自由時間に逃走中(ドロケイ)で遊んだ時は思いきり笑顔で、全力で楽しんでいたことが印象的であった。

<活動終了時の様子>

・非常に楽しかったようで、「まだ遊びたかった！」と話していた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・身体を思いきり動かせる活動(自由時間)があったことで、身体を目一杯動かして、思いきり友達と遊ぶ一面が見られた。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・これまでも工作には楽しんで取り組んでいたため、今回のような創作活動にも意欲的に取り組むのではないか。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・席に着いてすぐにテーブルに伏せ、「どうしたの？」と学生パートナーが尋ねても無反応であった。調子が悪そうであった。

<活動中の様子>

・AIを用いた画像生成はとても楽しそうに取り組んでいたが、自己紹介スライドを作成することを求められると「自己紹介したくない」と学生パートナーに伝え、テーブルに伏せて拒否した。

<活動終了時の様子>

・趣味の話をはじめたことでアンケートの回答に時間がかかり、終了の挨拶後に答え終えた。その際、学生パートナーが「気になることは？」と問うと、「ない！」などと即答し、早く帰りたいような様子であった。アンケートを答え終わった瞬間に席を離れ、背中に「またね！」と声をかけると学生パートナーを振り返らず挨拶して駆けていった。

<第4回の活動による子どもの変化>

・予想していた通り、創作活動はとても楽しんで参加していた。しかし、自己紹介カードの作成時は「やりたくない」と主張し、表情も暗く、テーブルに伏せるなどやりたくない気持ちが全面に現れていた。その後、学生パートナーから代替案・妥協案を出すと少しずつ顔を上げて頑張っており、やりたくない気持ちを様々な形で表出して一旦周りをシャットアウトする姿勢は、自分の気持ちを切り替えるためのIさんなりの工夫かもしれない。

(第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・席替えによるグループ編成の変更によって、別のフリースクールの子どもとも関わりを持ち、交友関係を広げられるかもしれない。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・だるそうにテーブルに伏していた。先生からの説明中には、リストバンドのテープのごみを小さくちぎっていた。

<活動中の様子>

・楽しそうにレゴ®ブロックに取り組んでいた。自分の興味関心が中心であったため、「住みたい部屋」よりも作りたいものを作っている時間が長かった。初めて同卓になったCさんにも「見て見て」と自分の作ったものを見せていたり、他のテーブルの子どもがパーツを探しに来た時も協力的であったりと、前回までと比べて他の子どもたちとの交流が多く見られた。

<活動終了時の様子>

・アンケートには、迷うことなく「とても」の付く項目(とても楽しかった等)を選んでいった。

<第5回の活動による子どもの変化>

・スクールを問わず、他の子どもとの交流が予想以上に沢山見られた。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・久々の参加のため、いろいろな話をしてくれるのではないかな。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・ありがとうの会の終盤からアンケート回答時間あたりに遅刻して来たこともあったためか、疲れた様子で、席に座るとまずテーブルに伏せた。本人曰く前日にスクールで行った活動が疲れたとのことであった。

<活動中の様子>

・学生パートナーに渡すメッセージカードをその場で作成してくれた。渡す時には描いたキャラクターが出てくるゲームについて説明するなど、いつものようによく話していた。

<活動終了時の様子>

・いつも通り、振り返ることなく帰っていった。

<第8回の活動による子どもの変化>

・各回アンケート時は活動を深く振り返ることは少なかったが、アルバムを渡すと「この時はこうだったね」といくつかのエピソードを振り返って話していた。



第2回Iさんの作品「将来住みたい家の庭」



第3回自由行動時の様子



第4回 Iさんの作品「今の自分」



第4回学生パートナーとAI画像生成に取り組む様子



第5回 Iさんの作品「将来住みたい部屋」



第8回学生パートナーと活動を振り返る Iさん

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・初回は視線が合いにくく会話も短かったが、工作や制作を通して徐々に表情や発話が増え、自分の趣味や考えを少しずつ話すようになった。
- ・屋外では身体を思いきり動かし、後半には他の子どもとの交流も広がった。気分の波や拒否表現も見られたが、最終的には活動を肯定的に振り返る姿が見られた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・無理に発言や参加を促さず、本人の気持ちを尊重して待つ関わりが安心感につながった。
- ・拒否が見られた際も代替案や選択肢を提示することで、自分のペースで気持ちを切り替え参加できた。
- ・長所を見つけて言葉にして伝えることで、関係形成を促した。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

- ・工作や自由度の高い制作環境が自己表現を引き出し、屋外で身体を動かせる時間が気持ちの発散につながった。
- ・第5回以降のグループ編成の工夫により他の子どもとの自然な交流が生まれ、活動と発表などの切り替えられる環境設定が安定した参加を支えていた。

Jさん 小学校中学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・穏やかな性格で他人を思いやる気持ちが強い。
- ・慣れない環境に不安になる。以前は母親との分離不安があったが現在はほぼない。他者と打ち解けるまでに時間がかかる傾向。知らない人が多い場面での集団行動が苦手。
- ・マインクラフトのように画面内で何かを作ることが得意。ゲームが大好き。
- ・パソコン教室に通っており、デジタルに関する知識が高い。PCの操作もすぐに理解できる。吸収力があり、新しい知識を得ることを好むので、色々と話したり教えてもらおうと、様々なことに興味を持つようになる。
- ・自由さへの戸惑いがあり、全くの自由だとアイデアが浮かばない。
- ・初めてのことに関わる場合、「あと何分？」と尋ね、終わりを気にする場面が多い。飽きではなく、緊張のためこの時間がどれほど続くのか気になるものと思われる。また、そのような時には、本人が何をしたらよいかわからない場合が多い。正確な時間を答え、「こういうことをしましょうね」と声かけすると動けるようになる。
- ・書字、作文、音読が苦手。
- ・運動能力はあまり高くない。体格が小さく、線が細いので、身体を動かす活動では不利になってしまう。的当てやキャッチボール等で目測をつけて投げるのが苦手。モルックでは、目測が外れたり、遠投することができないことがある。
- ・注意散漫で忘れ物が多い。水筒などを置きっぱなしにしてしまうことがある。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「未来を創造しよう！①」

<実施場所>

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・最初は初対面のため話しづらいかもしれないが、少しずつ打ち解けていくのではないかと。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・最初はこちらから話しかける感じであった。

<活動中の様子>

- ・次第に自分から積極的に話しかけてくるように。

<活動終了時の様子>

- ・活動に取り組みながら自分の話したいことを元気よく教えてくれた。

<第 1 回の活動による子どもの変化>

- ・すぐに打ち解け、自分なりの創作を行い、楽しそうにおしゃべりや活動を行っていた。

(第 2 回 10 月 31 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第 2 回の活動による変化の仮説

- ・学生パートナーとして初めての関わりだが、少しずつ打ち解けてくれるのではないかな。

●第 2 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・最初はお互い緊張してあまり話せなかったが、自己紹介をしながら共通点などを挙げ、仲良く話をする事ができた。

<活動中の様子>

- ・意欲的に活動しており、同じグループの子どもとの関わりもみられた。

<活動終了時の様子>

- ・とても満足し、来週も楽しみにしてくれた。

<第2回の活動による子どもの変化>

・初めての関わりということもあり、最初はとても緊張していたが、学生パートナーとゲームが好きなどの共通点が多く、すぐに打ち解けた。また、植物を調べるアプリにも興味を示し、とても意欲的に楽しんでくれた。来週が課外活動なので、他の子どもとのかかわりを楽しんでくれるとよい。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・外遊びもあるので、他の子ども達とのかかわりを楽しむのではないかと。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・最初はあまり意欲的ではなかったが、図鑑にするという作業に興味を示し、楽しんでいった。

<活動中の様子>

・自由時間に友達を誘いながらドロケイで遊んだ。

<活動終了時の様子>

・来週が室内遊びとわかり、とても喜んでいった。

<第3回の活動による子どもの変化>

・今回3回目(学生パートナーとは2回目)なので、学生パートナーは、前回課題であった「他の子ども達との関わり」を意識しながら活動した。最初は外遊びがそもそも苦手ということだったが、興味を引くような声かけをしたことで、活動に楽しく参加できた。特に自由時間には他の子ども達と関わりを持つことができた。現時点では同じ学校のコミュニティ内だが、今後その輪を広げることができるとよい。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう!②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・AIに興味を示していたので、楽しく活動してくれるのではないかと。ただ、他の子どもとのコミュニケーションはとりづらいかも。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・とても意欲的で、最初の図鑑の振り返りから活動的だった。

<活動中の様子>

・AIとアキネーターのような遊びをしながら画像生成をしていて、そのアイデアは見たこともないものだった。学生パートナーが足りない点を補う形でヒントを提示したため、より意欲的にかつ主体的に活動することができた。また、以前は自分で発表しなかったが「夢は自分で言いたい」と発表することができた。活動前の図鑑の活動でも学生パートナーが知らない機能を知っており、細かいところまで見えていた。

<活動終了時の様子>

・活動にとても満足し、全ての項目で一番高い評価だった。いつも「レロレロ」とボイスレコーダーに言っているが、室内であるためか、控えめに言っていた様子に、周りが見えており、空気が読めていることが感じられた。

<第4回の活動による子どもの変化>

・前回の活動とは大きく異なり、とても活発に参加していた。とても意欲的で、「帰ってからもやりたい」との発言も聞かれた。毎回椅子から立ち上がってしまうところが課題だったが、学生パートナーが声の掛け方を変える（「ここ見づらいよね」）など共感を入れることで改善されたのも特筆すべき変化であった。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

<活動タイトル>

「創造する①」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階

me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・席替えでグループが変わるので、緊張してしまうのではないかな

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・レゴ®ブロックがあることに興味を示し、とても楽しそうにしていた。

<活動中の様子>

・レゴ®ブロックに自分の好きなマイクラのパーツがあると知ってからは、ずっと夢中になって活動しており、とても楽しそうだった。

<活動終了時の様子>

・やはり時間がないという面では不満そうであった。

<第5回の活動による子どもの変化>

・人見知りをあまりすることもなく、自己紹介からスムーズにできており、レゴ®ブロックの交換なども積極的にできていた。

（第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30）

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-1-3 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・「プラネタリウムが苦手」と言っていたため、不安になるのではないかな。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・とても気だるそうにしていた。

<活動中の様子>

- ・アンケートの回答も意欲がなかった。

<活動終了時の様子>

- ・特に不満が募っていた感じはあり、やりたいことには没頭できるが苦手や興味のないものには全く興味がないようだった。

<第 6 回の活動による子どもの変化>

- ・子ども同士で「酔わない？」などを声掛けができていた。

(第 7 回 12 月 12 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

● 第 7 回の活動による変化の仮説

- ・担当する学生パートナーが欠席したため、寂しさはありつつ創作を進める。

● 第 7 回の活動による様子と変化 (ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載)

<活動開始時の様子>

- ・代わりに担当した学生パートナーとあまり目を合わせることもなく、物理的に距離があった。

<活動中の様子>

- ・熱心に AI へのプロンプトを考えていた。手描きのイラストを AI に落とし込むこともできることを伝えると、イラストを描き、AI 生成の画像に組み込むことができた。

<活動終了時の様子>

- ・まだまだ作りたい気持ちが溢れており、作り足りない、より良いものを作りたい様子だった。

<第7回の活動による子どもの変化>

・AIという関心のあるテーマだったからか、担当する学生パートナーが異なっても頑張って活動に参加することができていた。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・担当する学生パートナーの不在に対する感情のコントロールに時間がかかるかもしれない。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・担当する学生パートナーが欠席と知ると、すぐには席に来なかった。席に着いてから前回描いた絵について質問すると、いろいろ話してくれた。

<活動中の様子>

・担当する学生パートナーが不在である悲しみを抑圧しようとする発言が何度もあった。感情を抑えようとするほど落ち着きがなくなっていった。

<活動終了時の様子>

・賞状やメダルを折ったり壊したりして行動で感情を表し、感情の切り替えができないままだった。

<第8回の活動による子どもの変化>

・感情のコントロールは難しいようで、どんどん落ち着きなく行動していった。



第2回 Jさんが寄せ植え作品を作る様子



第2回 Jさんの寄せ植え作品
「将来住みたい家の庭」



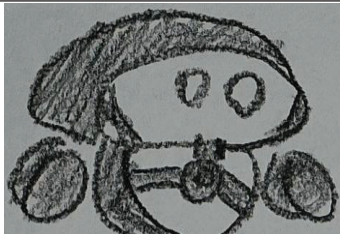
第4回 Jさんが学生パートナーと
自己紹介カードを発表する様子



第5回 Jさんが学生パートナーと作品を発表する様子



第5回 Jさんの作品「将来住みたい部屋」



第7回 Jさんが AI に取り込んだ手描きの絵



第7回 Jさんが学生パートナーと
手描きの画像を AI に取り込む様子

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・本活動を通じ、Jさんは比較的早期に環境や他者に慣れ、回を重ねるごとに主体的な発言や創作行動が増加した。特に自身の興味関心と合致した活動では高い集中力と意欲を示し、他の子どもとの関わりも自発的に見られた。一方、苦手な活動や信頼していた学生パートナーの不在時には、不安や感情の不安定さが顕在化し、意欲低下や行動面での乱れが生じた。
- ・全体として、安心できる人的環境と興味関心の有無が、活動参加や情緒の安定に大きく影響したと思われる。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・効果的だった支援として、本人の気持ちや考えを肯定する共感的な声かけが挙げられる。行動を制止するのではなく、理由に寄り添うことで、落ち着いて活動に参加できる場面が増えた。
- ・完成形を示さずヒントを提示する関わりは、自ら考え工夫する姿勢を促した。さらに、他の子どもとの関わりを強制せず、自然なきっかけを作る支援が有効であった。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・落ち着いて取り組める室内環境は、集中力や情緒の安定につながった。また、活動内容や流れが明確で見通しを持てる構成はと意欲向上に効果的であった。
- ・信頼関係を築いた学生パートナーの存在は安心感の基盤となり、活動への積極性を支えた。加えて、関わり方や表現方法を自分で選択できる環境は、満足度の高い参加につながった。

Kさん 中学生

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・他者の良いところを見つけるのが得意。会話などは、年齢に関わらず、誰とでもできる。小学生と一緒に移動行事に参加したこともあり、年齢の離れた子どもたちとも、程よい距離感で楽しむことができる。
- ・アニメ鑑賞、旅行やイベントが好き。外出やイベントには意欲的。
- ・自分から声をかけることは苦手。あまり自分からは話さないが、声をかければ返答はできる。声をかけすぎると、その人に合わせた回答をしようとしてしまうため、選択肢を増やすようなコミュニケーションの取り方が適している。
- ・気疲れしやすい。
- ・自己表現が苦手。発表などで考えがまとまらず、時間がかかることが多い。
- ・起立性調節障害の傾向が、入所時の保健調査で指摘された。朝起きるのが苦手なため、遅れてくることが多い。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・緊張して会話ができないかも知れない。心を全く開いてくれないかもしれない。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

- ・緊張している様子だったが、話しかけると返答があった。沈黙も気まずい様子ではあった。

＜活動中の様子＞

- ・折り紙で鶴とカエルを作った。初めて作ったようで自信に満ち溢れていた。

<活動終了時の様子>

- ・大事に持ち帰ろうと達成感のある表情だった。

<第1回の活動による子どもの変化>

- ・会話はでき、学生パートナーと友達のように接することができた。まだぎこちなさはあるため、少しずつ信頼関係を築いていけるのではないか。

(第2回 10月31日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第2回の活動による変化の仮説

- ・少し表情も明るくなり、プライベートの話もできるのではないか。

●第2回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・無理に会話をしているわけではなく、自然に続けていた。

<活動中の様子>

- ・花には興味がなさそうだったが、「どうせなら良い匂いのするものがいい」と自分で考え、見つけ出していた。活動自体も初めてで楽しそうな様子だった。

<活動終了時の様子>

- ・満足げな表情をしていた。持ち帰るか迷っていたが、「どうせなら自分が作ったものなので持ち帰ろう」と言っていた。

<第2回の活動による子どもの変化>

- ・前回よりも自然な会話が増え、笑顔も増えていた。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・楽しく活動をして鬼ごっこなどをして遊ぶのかも知れない。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・初め、あまり会話はなく、「暑いですね」などの世間話が多かった。

<活動中の様子>

・行きたい場所やジェットコースターの話などをたくさん話していた。やりたい活動がなく、戸惑っている様子だったが、遊びを自分から見つけ提案していた。

<活動終了時の様子>

・楽しそうな様子で表情も明るくなっていた。

<第3回の活動による子どもの変化>

・前回よりも自分から話題を振ることも話を広げることも多かった。無理して場を繋げているというより、話したいから話している様子だった。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう!②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2-8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

● **第 4 回の活動による変化の仮説**

・前回の活動が楽しそうだったため、今回も楽しんでいる様子がみられるのではないか。

● **第 4 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）**

＜活動開始時の様子＞

・国営昭和記念公園の振り返りにはあまり関心がないように見えた。AI の説明では興味を持ち、反応する様子がみられた。

＜活動中の様子＞

・終始笑顔が多く、自ら積極的に取り組んでいる印象だった。細かく、わかりやすく AI へ指示を出し、自分の理想に近づけられるよう取り組んでいた。

＜活動終了時の様子＞

・時間が余ったのでさらに理想に近づいた画像を再生した。その際も「まだかな、早くみたい」など前向きな言葉が多く、活動にも満足している様子だった。

＜第 4 回の活動による子どもの変化＞

・今回が一番積極的で笑顔も多かったように見えた。

（第 5 回 11 月 28 日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「創造する①」

＜実施場所＞

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

● **第 5 回の活動による変化の仮説**

・前週、活動がお休みだったこともあり、また関係性が離れているのではないか。レゴ®ブロックに興味を持ってくれるかはわからない。

● **第 5 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）**

＜活動開始時の様子＞

・自分の理想とは何か、自分は何を作ればいいのかなど戸惑っている様子がみられた。

<活動中の様子>

・自分の中で「こうしたい」、「これが理想だ」というものを見つけたようで、熱中して取り組んでいた。白を基調として、シンプルでおしゃれな仕上がりにしていた。

<活動終了時の様子>

・「レゴ®ブロックにハマったから買って家でやろうかな」と言っていた。表情も明るく、達成感や喜びに満ちていた。

<第5回の活動による子どもの変化>

・最初は戸惑いがありながらも、自分なりに活動を楽しめるものにできていた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-13 コニカミルタサイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-73 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

・プラネタリウムを楽しみにしてきてきているのかもしれない

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・少し疲れている様子だった。話を聞くと「夜更かしをされていて4時間睡眠」と言っていた。

<活動中の様子>

・初めの方はプラネタリウムを見て少し感心する場面や笑う場面が見られたが、その後は寝ていた。

<活動終了時の様子>

・「星が綺麗だった」と感想を述べていた。同じグループの子どもと格闘技について盛り上がっていた。自分から話を振ることもあった。

<第 6 回の活動による子どもの変化>

- ・他の子どもとの関わりがたくさん見られ、きっかけさえあれば自分から関わることができることがわかった。

(第 8 回 12 月 19 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう！」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 8 回の活動による変化の仮説

- ・熱中しながら活動に取り組んでくれるかもしれない。

●第 8 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・ゲームの話をしたら、K さんからもたくさん話題を振るようになった。

<活動中の様子>

- ・時間が短いこともあり、K さんから「こうしたい」という案をたくさん出してくれた。熱中して取り組んでおり、理想に近づくと嬉しそうだった。

<活動終了時の様子>

- ・少し照れながら「ありがとうございました」と書かれた紙をくれた。これまでの活動を振り返り、「いろいろあったな」と回想していた。

<第 8 回の活動による子どもの変化>

- ・他の子どもの作品に対しても、「すごい」、「面白い」など反応する様子が見られた。学生パートナーが来て拍手をしなくても自分で拍手をしていて、他の子どもへの意識も芽生えたのだと実感した。



第2回Kさんの寄せ植え作品
「将来住みたい家の庭」



第3回Kさんが植物を観察する様子



第4回AI講師がKさんへ
助言する様子



第4回Kさんが学生パートナーと
自己紹介カードを作成する様子



第5回Kさんが他のテーブルへ
ブロックを借りに行く様子



第6回KさんとFさんが格闘技について
会話する様子



第7回Kさんの作品「未来都市東京」

●全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動全体を通じた様子と前後の変化＞

- ・活動当初は緊張や戸惑いが見られたが、回を重ねる中で徐々に表情が和らぎ、自分から話題を提供し、創作に集中する姿が増えた。特に興味関心のある活動では高い集中力と主体性が見られた。
- ・苦手な活動や環境変化の際には不安や意欲低下が見られ、安心できる人的・活動環境が参加態度に影響する傾向が見られた。

＜活動全体を通じて効果的だった支援方法＞

- ・本人の気持ちや考えを肯定する共感的な声かけが、安心感と関係性の形成につながった。また、AI や制作活動など興味関心を起点に関わることで、自身で考え集中して活動に参加した。
- ・完成を目指すのではなくヒントを提示する支援は、自ら考え工夫する姿勢を促した。他児との関わりも、自然なきっかけを作る支援が効果的であった。

＜活動全体を通じて効果的だった環境設定＞

- ・落ち着いて取り組める室内環境や関心のある活動は集中力につながった。活動の流れや目的が明確で見通しを持てる構成は、不安軽減と意欲向上に影響を及ぼした。
- ・信頼関係を築いた学生パートナーの存在は大きな安心材料であった。また、関わり方や表現方法を自分で選べる環境は、作品の完成および満足度感と自己肯定感につながった。

Lさん 小学校高学年

●子どもの特性（事前ヒアリングシート・事前アンケート等より）

- ・優しく、まじめ。
- ・ゲーム、謎解きなど考えることが好き。
- ・気持ちの切り替えに時間がかかる。傷や痛みにも敏感。
- ・拘りが強く、あまり挑戦したがない。
- ・慎重。うまくできないと、落ち着かなくなる。
- ・失敗を恐れる。ゲームなどで不利な状況になったとき、他人のせいにしてしまう。
- ・他者と打ち解けるまでに時間を要する。初めての環境では、母親を介さないと話せない場面が多い。フリースクールにも、最初の1年間は、母親同伴でなければ授業に参加できなかった。その後、母親に送迎してもらい、ひとりで授業に参加している。

●各回の活動概要

（第1回 10月24日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「未来を創造しよう！①」

＜実施場所＞

・実施場所①〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第1回の活動による変化の仮説

- ・緊張から同じ空間での活動が難しかったため、次回、次々回には他の子どもと同じ空間で過ごせるかもしれない。

●第1回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

- ・下を向き、母親以外との交流を絶っていた。

＜活動中の様子＞

- ・学生や母親が声をかけて活動を促そうとしてもなかなか動かない瞬間が長かった。

<活動終了時の様子>

- ・開始時よりは学生パートナーに対する警戒心が解けていた。

<第 1 回の活動による子どもの変化>

- ・初めての空間に適応しようとしている気概が感じられた。最後の全体発表では、ラボ研究代表者が L さんに部屋の入口から見えることを伝えると、母親の背中越しに自身と他の子どもの作品を少しだけ見ることができた。

(第 2 回 10 月 31 日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

- ・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町 2 丁目 8 - 2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階 me:rise 立川 Conference Room

●第 2 回の活動による変化の仮説

- ・まだ学生パートナーに対して警戒心、緊張を持っていて会話は難しいかもしれない。

●第 2 回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・パーティションを設定し、隣の部屋の隙間から活動場所を見ることができる場所に L さんのテーブルを設置した。その配置のおかげか、少し離れてはいるものの、他の子どもと同じ空間での活動をするを自分で決めていた。

<活動中の様子>

- ・自分が興味のある昆虫を含めた寄せ植えを作ろうとしており、意欲が感じられた。

<活動終了時の様子>

- ・作り上げた作品に満足している様子が見られた。

<第 2 回の活動による子どもの変化>

- ・前回と同じ空間であるため、慣れたように学生パートナーと会話をしようとする様子が見られた。

(第3回 11月7日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「自然に触れる②」

<実施場所>

・実施場所② 〒190-0014 東京都立川市緑町3 1 7 3 国営昭和記念公園

●第3回の活動による変化の仮説

・まだ学生パートナーに慣れず、母親とは離れづらく共に行動するのではないか。

●第3回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・母親と離れて移動したため、少し緊張して口数が少ない。

<活動中の様子>

・だんだん慣れてきて、自分から学生パートナーに話しかける様子が見られた。

<活動終了時の様子>

・学生パートナーと昔の思い出などを振り返るほど余裕があった。

<第3回の活動による子どもの変化>

・母親とほとんど離れていても活動できるようになっていた。

(第4回 11月14日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ②」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第4回の活動による変化の仮説

・活動の場に慣れて、活動にすんなり入り、好きなものを突き詰めるのではないか。

●第4回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・AI講師の説明を聞けるように、パーテーションの隙間をやや広げたことから、少し退避スペースに入ることや、他の子どもがいる活動スペースに近づくことをためらう様子が見られた。

＜活動中の様子＞

・AIに対して興味を示し、活動しようとする様子だった。

＜活動終了時の様子＞

・楽しそうに会話をして、終了時に側に来た母親と今回の活動内容について話していた。

＜第4回の活動による子どもの変化＞

・最初の一步を踏み出す時はまだ不安を感じる様子があったが、一度踏み出すと進んでいける様になり、ひとりになる耐性がついてきた。

（第5回 11月28日 金曜日 10:00-11:30）

＜活動タイトル＞

「創造する①」

＜実施場所＞

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-28 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第5回の活動による変化の仮説

・活動テーマに沿わずに、好きなものを好きなように作るのではないか。

●第5回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・Lさんの退避スペースに大人が多く入ってくることに對して、少し躊躇っていた。

＜活動中の様子＞

・好きなものを好きなように自由に作っていた。

<活動終了時の様子>

- ・同じスクールの友達と会話をして作品を共有している様子が見られた。

<第5回の活動による子どもの変化>

- ・良い意味で前回と変わらず、自由に活動できていた。

(第6回 12月5日 金曜日 11:00-12:30)

<活動タイトル>

「創造する②」

<実施場所>

・実施場所③ 〒192-0062 東京都八王子市大横町9-1-3 コニカミノルタ サイエンスドーム（プラネタリウム） 〒190-0014 東京都立川市緑町3-1-7-3 国営昭和記念公園

●第6回の活動による変化の仮説

- ・場所見知りをして、最初は緊張気味で途中で退席をする可能性もあるが、最後の方には会話ができるのではないか。

●第6回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

- ・やはり場所見知りか、学生パートナーの問いかけに少し薄い反応だった。

<活動中の様子>

- ・大きな音が出る時に、驚いている様子があった。寝ている様子が多々見られたが、退席することなく座っていた。

<活動終了時の様子>

- ・起きている瞬間に見た星座について楽しそうに学生パートナーと会話をしていた。

<第6回の活動による子どもの変化>

- ・退席する可能性を考えていたが、最後まで座っていることができていたため第1回と比べて大きな成長が見られた。

(第7回 12月12日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「未来を創造しよう! ③」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階
me:rise 立川 Conference Room

●第7回の活動による変化の仮説

・自分の興味あることを中心に活動するが、学生パートナーに判断を委ねる場面が多くあるのではない
か。

●第7回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

<活動開始時の様子>

・今回はAI講師の説明をより近くで見たり聞いたりできるよう、活動スペースにLさんのテーブルが半分
入っている状態で環境設定を行ったが、他の子どもたちが既に着席していることを知ると、すんなり入室す
ることが出来た。AI講師の説明を聞いている様子もあった。

<活動中の様子>

・興味のある虫についてたくさん意見を出して意欲的に取り組み、自分で決めている印象であった。

<活動終了時の様子>

・動画を作れなかったことに対して、少し不満気ではあったが、すぐに切り替えていた。終了後に側に来た
母親に活動内容を楽しそうに報告していた。

<第7回の活動による子どもの変化>

・他の子どもとの対話が増え、興味のあることに対しては意欲的に自分で決めることが出来ていた。

(第8回 12月19日 金曜日 10:00-11:30)

<活動タイトル>

「発表会 未来都市に行こう!」

<実施場所>

・実施場所① 〒190-0012 東京都立川市曙町2丁目8-2 8 TAMA MIRAI SQUARE3 階

me:rise 立川 Conference Room

●第8回の活動による変化の仮説

・いつも通り虫の動画を作ろうと張り切り、会話もこちらから話しかけると沢山続くのではないかな。

●第8回の活動による様子と変化（ラボにおける記録・協力FSスタッフへのヒアリング等から記載）

＜活動開始時の様子＞

・今回は初めて活動スペース内に他の子どもと同様にLさんのテーブルを設置した。少し元気が無さそうな雰囲気であったが、他の子どもと同じ空間での活動にすんなり移行できた。

＜活動中の様子＞

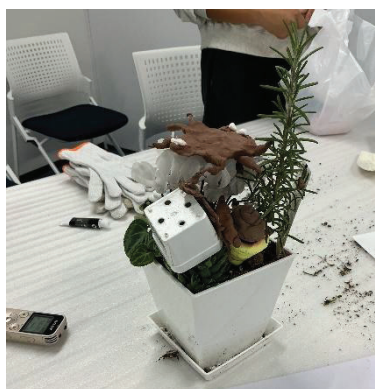
・意欲的に動画制作を行っていた。

＜活動終了時の様子＞

・学生パートナーから渡された賞状やアルバムを眺めていた。最後お別れの際には自分から猫の写真などを学生パートナーに見せた。最後は、学生パートナーを見て手を振っていた。

＜第8回の活動による子どもの変化＞

・活動中に他の子どもの発表を聞いて小さく感想を言ったり、自分なりに考えて作業したり、アンケートに答える様子が見られた。



第2回Lさんの寄せ植え作品
「将来住みたい家の庭」



第3回初めて保護者と離れて
学生パートナーと行動を共にするLさん



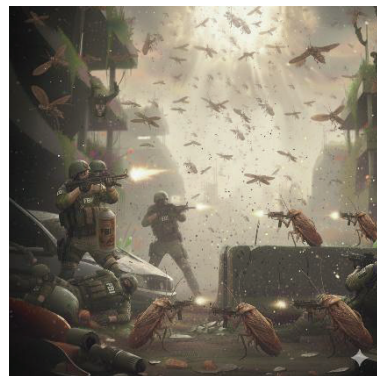
第4回 Lさんが学生パートナーと AI 画像生成に取り組む様子



第5回 IさんがLさんへ作品を見せている様子



第8回 ありがとうの会で学生パートナーにメッセージを渡すLさん



第7回 Lさんの作品
「100年後の未来都市」

● 全回を通じた活動の様子と変化（ラボにおける記録・協力 FS スタッフへのヒアリング等から記載）

<活動全体を通じた様子と前後の変化>

- ・初回は緊張が強く活動場所に入れず母親から離れられなかったが、学生パートナーがその場所に行き関わりを行った。回を重ねるごとに環境や学生パートナーに慣れ、同じ空間で活動できる時間が増えた。
- ・第3回の屋外活動が転機となった。
- ・後半は母親と離れても安定して過ごし、興味のあるテーマでは自発的に発言や制作、他の子どもとの関わりも見られるようになった。

<活動全体を通じて効果的だった支援方法>

- ・無理に関わりを促さず、本人の興味やペースを尊重した声かけが効果的だった。
- ・学生パートナーが安心できる存在として継続的に関わり、自身の表現を評価・承認されることにより成功体験を積み重ねたことで自信が育ち、自発的な会話や選択行動につながった。

<活動全体を通じて効果的だった環境設定>

・パーテーションの使用やテーブル配置の調整など、段階的に他の子どもとの距離を縮める環境設定が安心感につながった。活動内容や目的の説明、見通しの立つ配置や慣れた場所の活用により、不安が軽減され、最終的には他の子どもと同じスペースで活動できるようになった。

第4章 支援者に必要な資質・能力の分析

4.1 支援者に必要な資質・能力の検証方法と仮説

支援者に求められる資質・能力の仮説

- ・「待つ力」が信頼関係構築の基盤となる
- ・「共感的理解」が子どもの自己表現を促進する
- ・「柔軟な対応力」が活動の質を左右する
- ・「自己開示」が距離を縮める

依拠したデータ

- ・子ども 12 名に対する全 8 回の活動記録（アンケート調査）
- ・学生パートナーによる毎回の振り返り発言記録（振り返りの文字起こしデータ）
- ・最終回後の全体振り返り会議の記録
- ・子どもの事前・事後アンケート
- ・学生パートナーの事前・事後アンケート
- ・協力 FS の先生からのフィードバック

4.2 支援者に必要な資質・能力の検証における記録方法

・支援者に必要な資質・能力の検証のための記録方法として、子どもとの会話に関する内容分析が挙げられる。周囲の大人や支援者は、子どもの話を聞く姿勢を持つことを意識していることが多いと思われる。一方、聴くことは容易ではない。子どもとの会話を通して、どこかで子どもの内面や考えに触れることができるかどうか振り返るには、上記方法が推奨されることが考えられる。

4.3 支援者に必要な資質・能力の検証における分析ツール・手法

・一般的に可能かどうかは難しい判断となるが、エクセルや SPSS、R などの統計解析を使用することで分析が可能となるだろう。分析の視点をプロンプトに入力することで、AI による分析も可能になるとと思われる。

4.4 支援者に必要な資質・能力の検証における検証結果

- ・すべての仮説の中で、「待つ力」と「共感的理解」が最も多くの場面で効果が見られたと考えられる。これらは専門的なスキルというよりも、支援者の基本的な「姿勢」であり、研修によって意識づけることが可能である。
- ・活動はきっかけにすぎないため、支援者が「何かをする」ことよりも、子どもが本来持っている力を「引き出

す」環境を整えることが重要だと考えられる。

・1対1の支援では、信頼関係、個別理解が必要となり、複数対応では全体の関係性や集団力動を見る力が求められる。

・学生パートナーの活動前後のアンケートから、各品詞とその内容と数に着目した分析を行った。

学生パートナーの変化 1

活動前後の Q1 の頻出語に見られる相違から、活動を通して子どもに関わる心構えと姿勢の変化が確認できた。「子どもとどのようにかかわることができそうでしょうか？」という Q1 の問いに対して、活動前の回答では、根拠が明示されない自己能力の評価が中心であったが、活動を通して、関わる相手である子どもを強く意識するようになった。

この変化は、「子・子ども」の出現頻度の変化と、「形容詞」の出現頻度の変化から捉えられる。活動前の回答を見ると、「子（度数 1）」と「子ども（度数 3）」を合わせて 4 回しか出現しておらず、関わる相手を十分に意識していないことがわかる。一方、活動後の回答では、「子」と「子ども」は合計 14 回出現しており、子どもに合わせて対応するという意識の変化がみられた。

学生パートナーの変化 2

活動前後の Q4 の動詞および名詞の出現頻度（延べ語数）および文字数に相違がみられることから、活動を通して活動における意識変化が確認できた。

Q4 は「あなた自身が今後の活動において、意識していることはなんですか？」という問いかけであるが、活動前に比べて活動後の動詞および名詞の出現頻度が大幅に高くなったことが確認できた。動詞は動作、動きなど学生パートナーが活動において意識している内容を具体的に示す品詞であり、名詞は意識している対象などを示す品詞である。動詞と名詞の使用頻度が高くなったことは、活動前に比べて活動後のほうが意識している内容が多くなったことを示唆する。

活動前後で使用している動詞を見ると、活動前では、「関わる」「思う」など、比較的抽象的な動詞が多いが、活動後では、「違う」「寄り添う」「向き合う」「合わせる」といった相手を意識しつつ、具体的な活動を示す動詞が多い。このことから、活動を通して意識したいこと、または意識すべきと考えたことがより明確になったと考えられる。

4.5 まとめ

・本検証により、不登校傾向のある子どもへの支援において、「待つ力」と「共感的理解」が最も基盤となる資質であると考えられる。支援者に求められる具体的な関わり方、および効果的な環境設定については、第 5 章「調査研究に関する総括」にて詳述する。

第5章 調査研究に関する総括

5.1 調査研究において実施された活動内容の効果

本プロジェクトのタイトルは以下の通りである。本項では、タイトルに表象される活動概要および内容を紹介し、その効果について検証する。

「子どもの視点と関係性を広げる ICT を活用した未来創造プロジェクト
ー心理社会的観点に基づく子ども理解と支援のあり方の検証ー」

本調査研究では、フリースクールに通う子ども 12 名を対象に、全 8 回の未来創造プロジェクトを実施した。活動内容は、工作・寄せ植え・植物園での自然観察・AI 画像生成・レゴ®ブロック創作・プラネタリウム見学・未来都市の可視化・発表会で構成され、学生パートナーが 1 対 1 で継続的に関わる形式で実施された。

本調査研究における狙いは以下 3 点である。

①視点の拡張

<活動>

- ・#1 未来を創造しよう！① 工作（好きなもの）
- ・#2 自然に触れる① 寄せ植え（理想の庭）
- ・#3 自然に触れる② 国営昭和記念公園（広大な自然）
- ・#4 未来を創造しよう！② AI 自己紹介（10 年後の理想の自分）
- ・#5 創造する① レゴ®ブロック（将来住みたい家）
- ・#6 創造する② プラネタリウム（宇宙の広がり）
- ・#7 未来を創造しよう！③ AI 100 年後の未来都市東京（こうなっていたらいいな）
- ・#8 発表会未来都市に行こう！ 全体発表会（みんなで創る未来都市東京）

#1 は学生パートナーとの関係形成および子どもの興味関心からスタートし、#2 寄せ植えから #3 国営昭和記念公園へ、#5 レゴ®ブロック作成から #6 プラネタリウムへと、活動を広げた。同時に、時間的拡張も目指した。具体的には、#1 好きなものから #2 理想の庭、#3 広大な自然、#4 10 年後の理想の自分、#5 将来住みたい家、#6 宇宙の広がり、#7 個人で想像する 100 年後の未来都市東京、#8 全体で創る 100 年後の未来都市東京へと、視点が拡張するよう活動を計画した。

段階的な活動の実施

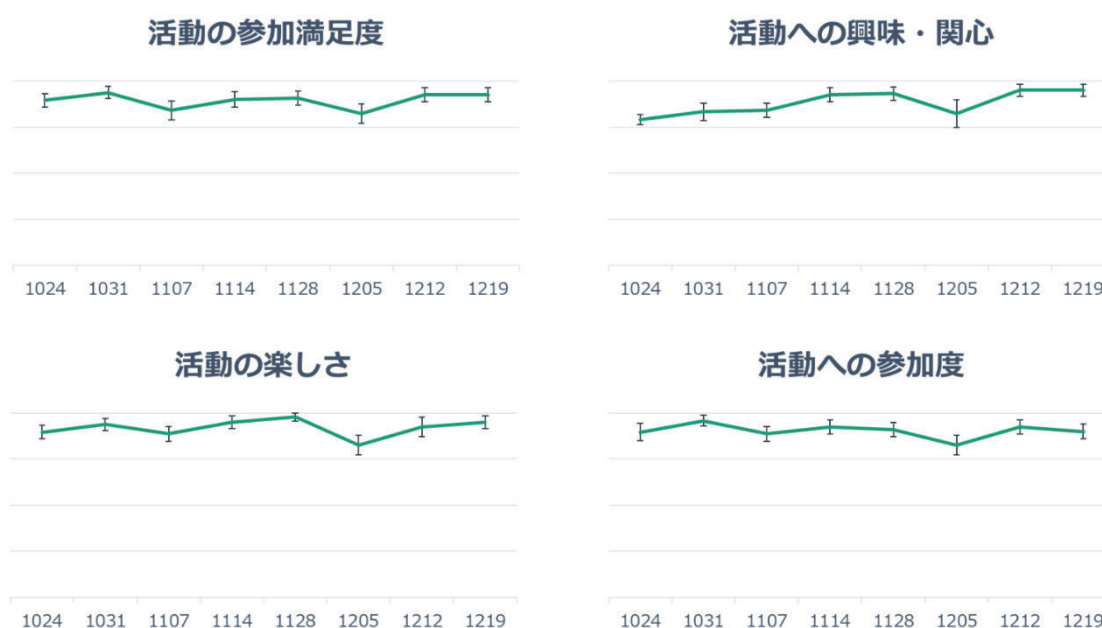
自己紹介

・#1 ラボメンバー> #2 活動に協力する関係者> (#3 国営昭和記念公園) > #4 子どもの AI 自己紹介

自己紹介に関し、最初から各子どもが全体で発表する形式ではなく、回を追う毎に少しずつ知っていくようにし、自分の制作した作品を通して自己紹介を行う等の工夫を取り入れた。

次に調査研究において実施された活動内容の効果について定量的に検討を行う（結果：表 1）。本調査研究では、毎活動後に振り返りとして、子どもの活動の参加満足度、活動への興味・関心をリッカートによる 4 件法で尋ねた。

表 1 子どもの活動後のアンケート調査



<参加率>

83.3%であった。欠席理由は、学校の行事、体調不良等やむを得ない理由であり、活動に対する不参加希望の内容はなく、最終回も子ども全員が参加した。

<子どもの活動の参加満足度>（表 1）

全 8 回を通して、各回の平均値がすべて 3.30 以上でありであり、3.00 がやや満足、4.00 がとても満足であるため活動に対する子どもの満足感が示された。

<活動への興味・関心> (表 1)

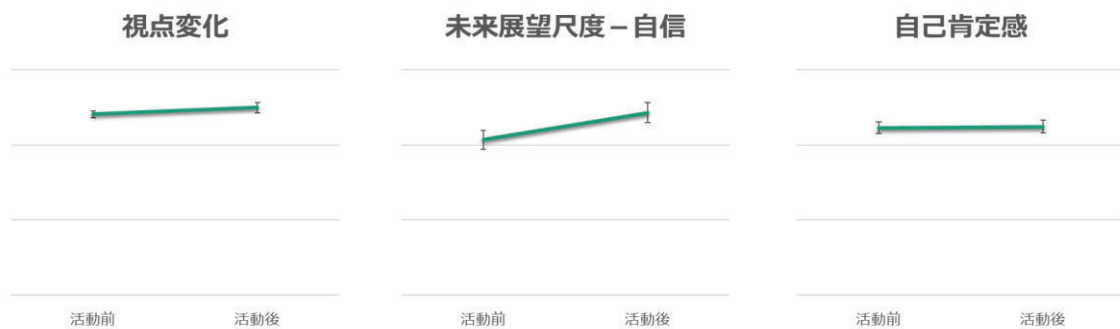
全8回を通して、各回の平均値がすべて3.17以上でありそれぞれ3.17、3.33、3.36、3.70、3.73、3.30、3.80、3.80であり、3.00がやや満足、4.00がとても満足であるため、本活動が子どもの興味・関心を引き出したことが示された。

<活動の楽しさ> 全8回を通して、各回の平均値がすべて3.30以上であり、3.00がやや満足、4.00がとても満足であるため、本活動に子どもが楽しさを感じていたことが示された。

<活動への参加度> 全8回を通して、各回の平均値がそれぞれすべて3.30以上であり、3.00がやや満足、4.00がとても満足であるため、本活動が子どもが楽しさを感じていたことが示された。

次に、子どもの視点の拡張を測定するため、全活動の最初と最後に行った視点変化、未来展望尺度、自己肯定感に関する結果を示す。

表 2 子どもの活動前後のアンケート調査



<未来展望尺度> (表 2)

統計解析として置換検定を行ったところ、前後の2値平均には変化が見られた。

<視点変化> (表 2)

統計解析として置換検定を行ったところ、前後の2値平均にはやや変化が見られた。

<自己肯定感> (表 2)

統計解析として置換検定を行ったところ、前後の2値平均には変化は見られなかった。

上記より、本活動への参加により統計的に有意な傾向のある差が見られたのは、未来展望尺度、視点変化であった。この結果は、本研究のねらいである視点の拡張に関する成果と位置づけられるだろう。この結果について、以下が考えられる。1) 目的に沿った活動内容を設定できたこと、2) 子どもがその趣

旨を、毎回、活動開始時、終了時に確認することで理解してくれたことによる。ここまで変化が見られたことは特筆に価することといえる。一方、自己肯定感は 8 回の活動のみでは変化しづらいこと、母数が 12 名と少ないことから変化が見られにくかったと考えられる。これらは平均値の差の比較であるため、割合は少ないものの変化が見られた子どももいた。ただし、協力者が少数であるため、結果の検討には考慮を要する。今後、同様の活動を大規模対象に実施することで、検証可能となるのではないか。

同時に少数に対する統計解析には限界があるため、関係性に関しては以下に学生パートナーの活動後の振り返りから定性的分析により効果の検討を行う。

②関わりの拡張

・子どもと学生パートナー→ 子ども同士> 全体

上記のように子どもと学生パートナーの 1 対 1 の関わりを基盤に、関係性を拡張していくことを目指した。具体的には、以下を実施した。

<子どもと学生パートナー>

・前半：子どもと学生パートナーの関係形成を中心とした。

<子ども同士>

・後半：各フリースクールが混ざるよう、先生方と相談しながら趣味や状況を勘案しグループを改編し、グループでの共有時間を設けた。#5 では、各テーブルに特徴的なレゴ®ブロックを配置し、貸し借りを行うよう設定した。

<全体>

・全回：最後に共有タイムを設けた。作成した作品をスライドに投影し、その説明を子ども本人/学生パートナーが行った。研究代表者が司会を務め、作品の感想や素敵な点を全員で共有した。最終回は、全体の発表会の回とし、各子どもの作品を共有することで全体として「100 年後の未来都市東京」が浮かび上がるよう設計した。

【子どもの変化に関する効果】

学生パートナーの振り返りから

・コミュニケーション：耳打ちでしか話せなかった子どもが普通の声で会話できるようになった。無反応だった子どもが自分から話しかけるようになった。

・他者への関心：他の子どもの発表を見なかった子どもが、拍手をし、「すごいね」「きれい」と感想を言えるようになった。

- ・自己肯定感：「自信がない」と回答していた子どもが、事後アンケートで「自分に自信がある」と回答するようになった。
- ・他者信頼感：「人を信頼できる」「居場所がある」という項目にポジティブな回答をする子どもが増加した。
- ・主体性：受け身だった子どもが、自分から活動に取り組む、他の子どもに話しかける、発表するなどの主体的な行動が見られるようになった。
- ・将来への展望「将来のことはよくわからない」と言っていた子どもが、具体的な目標や夢を語るようになった。

活動中の会話から

子どもに変容を促す支援者の関わりとして、以下 4 点を挙げることができる。

- ・対等性 教える-教えられるではない関係はその場の心理的安全性を担保する。
- ・応答性 子どもの興味への即座の対応は、子どもの内発的動機づけを高める。
- ・継続性 8 回・約 2 ヶ月の継続的な関わりは信頼関係を形成し得る。
- ・肯定性 無条件の受容と過程を重視することで、子どもの自己効力感が向上し得る。

これらを代表するような学生パートナーの応答と同時に大きな変化が見られた子ども 1 名の活動中の会話を取り上げ、個別の会話分析を行った。分析の結果、当初は極度の緊張と沈黙を示していた子どもが、8 回の交流を通じて段階的に変容し、最終的には学生パートナーとの対等な会話関係を構築するに至った過程が明らかになった。その過程と影響要因を以下に述べる。

【過程の特徴】

第一に、子どもの発話量と質が劇的に変化した。第 1 回では目を閉じ、母親を介した間接的コミュニケーションしかできなかった児童が、第 3 回で母親不在での二人行動を経験し、第 4 回以降は自発的な話題提示と冗談を交えた対等な会話を展開するようになった。第 8 回では発表会に対する不安を表明するまでに成長した。

第二に、学生パートナーの「無条件の受容」と「拡張的応答」が変容の鍵であった。子どもの一貫した興味（虫など）の対象である、社会的にタブー視されがちな話題を否定せず、むしろ活動の中心に据え興味を示すことで、心理的安全性が確保された。

第三に、会話の主導権は、母親による完全統制から、学生パートナーとの共同主導へと移行した。この過程は、Lave & Wenger (1991) の「正統的周辺参加」から「十全的参加」への軌跡²と一致する。

² 周辺の役割から次第に中心的な役割や参加へと移行すること。

【影響要因としての学生パートナーの応答】

次に、子どもに変容を促した学生パートナーの発言をその意味とともに記述する。

・安全な環境の構築（第1回）

「ちっちゃいゲームとか結構やるんで。ちょっとね、はじめましてですから。そうですね。外に出ても大丈夫です。」「外に出ても大丈夫」という発言は、「参加の枠組み」(participation framework)を柔軟に調整する行為であり、子どもに「参加しなくてもよい」という選択肢を提供した。(この点は、事前に代表者が学生に対し、「中に入れない子どもには無理をせず、まずは外の公園から、次回は廊下など少しずつ無理せず次回につながる関わりを行ってもらえたら」、と伝えていた)

「私も苦手です。一緒ですね。眠いですかね。無理そうなら無理でも全然大丈夫なんで。このままゆっくり過ごしましょうか。」(話者1、第1回 04:16)「私も苦手」という自己開示と「無理でも全然大丈夫」というメッセージの組み合わせは、子どもの状態を受容しつつ、対等な立場から共感を示す戦略として機能した。

・興味の無条件的受容と拡張（第2回～第4回）

子どもの興味(虫など)は、一般的には忌避されがちな話題である。しかし学生パートナーは、これらを一貫して否定せず、むしろ活動の素材として積極的に取り込んだ。「相性が悪いな」というLさんの発言に対する学生パートナーの反応は特に注目に値する。

「相性悪いね。相性の悪い子でも共存するっていう題名ですよ」(話者1、第2回 34:06頃)学生パートナーは、子どもの観察的コメントを活動全体の「テーマ」へと昇華させた。この「拡張的応答」(expansion)は、子どもの発言が持つ価値を高める効果があり、以後の発言意欲を促進したと考えられる。

・対等な立場の演出（第3回以降）

第3回の植物観察では、学生パートナーは子どもの質問や興味に即座に応答し、知識を共有する対等なパートナーとしての行動が見られた。「食えるの?」という質問に対して、「家の近くに生えてたら食べてみて。で、ちょっと今度感想聞かせて」

「今度感想聞かせて」という発言は、単発的なやりとりを超えて、継続的な関係性を示唆するものであり、子どもの次回へのつながりと期待に寄与したと考えられる。

・知的好奇心の肯定と共感（第4回・第7回）

AI画像生成の活動では、学生パートナーは子どもの批判的思考を積極的に評価した。「AIはケチだっ」(話者1、第4回 01:12:39頃)子どものAI評価を、否定や矯正ではなく「代弁」する形で受け止めている。第7回では、AI画像の矛盾点を指摘した子どもに対して、

「ほんとだ。よく気づいたね。え、頭よ。え?天才じゃん。」(話者1、第7回 08:19)

この肯定的フィードバックは、子どもの知的能力を高く評価するメッセージであり、自己効力感の強化に直結する。「天才じゃん」という表現は、子ども自身が第 4 回で述べた「（自分は）天才だから」と共鳴し、相互的な承認関係の成立を示している。

・発表への不安に対する励まし（第 7 回）

「虫しか作ってないよ」という不安の表明に対して、学生パートナーは以下のように応答した。「これから作ればいいんだよ」（話者 1、第 7 回）過去の作品を否定するのではなく、不安を過度に慰めるのではなく、「未来に向けた建設的な提案」として応答した。この短い一文は、子どもの感情を受け止めつつ、前向きな行動へと導く効果的な介入として評価できる。

子どもの変容は以下に総括される。第一に、社会的次元として特定の他者（学生パートナー）との信頼関係に基づく社会的参加能力が獲得されたこと。第二に、認知的次元として自己の興味を言語化し、他者と共有し、さらにそれを活動の企画へと発展させる能力が成長したこと。第三に、情動的次元として不安の言語化が可能になったことに見られる情動調整能力の発達である。上記にも示したが、支援者としてのあり方については、第 6 章も参照されたい。

③その他

ICT の活用

- ・すべての回でタブレットを使用した。たとえば、毎回の振り返りアンケート、作品の画像、# 3 国営昭和記念公園での植物図鑑作り、# 4 AI 自己紹介、# 7 AI 100 年後の未来都市東京など。
- ・特に、AI に関しては、講師を招聘。子どもとの対話の中で学生パートナーが操作しながら作品を作成し、会話のツールとしても機能した。特に、# 4 AI 自己紹介、# 7 AI 100 年後の未来都市東京で使った。

「ICT 活用」により、活動の発展に以下のように寄与した可能性が考えられる。

- ・発言が苦手な子どもも含め、画像を介して作品を全体へ共有することにより、全体での活動に広がり関係性の拡張につながる。
- ・自身の作品を他者に見られず、自由に創造できる。
- ・活動写真を保存することで、各回や全回の内容の振り返りや整理ができる。
- ・手書きより創造性が高まる。
- ・画像だけでなく、動画を作成することで、3 次元の空間を表現できる。

【活動外への波及効果】

フリースクールの先生からの共有により、活動が子どもの日常生活にも波及していることが確認された。

- ・普段は受け身だった子どもが、フリースクールの文化祭で「先生に何をしたらいいですか」って初めて聞きに来てくれた
- ・市の活動で、他の中学生に自分から話しかけるようになった
- ・学校の試験を受けに行くようになった子どもがいた
- ・活動後、家でも創作活動に取り組むようになった

5.1.1 子ども一人ひとりの興味関心を引き出す支援方法

①待つ姿勢

多くの場面で効果が確認されたのは、支援者が「待つ」姿勢を取ることであった。子どもが自分の言葉で話し始めるまで待つ、活動に取り組む始めるまで見守る、活動を最後まで見守るといった姿勢が、子どもの安心感と主体性を引き出したと考えられる。

具体的な例として以下を挙げる。

- ・「私はただ隣でへへって笑って会話しているだけだった。それで本人の個性が開花した」（学生パートナーの記録より）
- ・「鶴の折り紙で動画を何度も巻き戻しながら、手を貸さず見守った結果、自分で完成させる達成感につながった」（学生パートナー振り返りより）

②興味・関心に寄り添った柔軟な対応

活動内容を子どもの興味・関心に合わせて柔軟に変更することが、意欲の向上につながった。

- ・植物に興味がない子どもに「食べられるか調べてみる？」と提案したところ、積極的に活動するようになった。
- ・「名前は何でもいいよ」と自由度を与えたところ、「レロレロ大図鑑」という独創的な作品が生まれた。
- ・AI 画像生成では、子どもの興味（三国志、格闘技、猫など）をテーマにすることで意欲が高まった。

③共通点を見つける・自己開示

支援者が子どもとの共通点を見つけたり、自分の弱みを開示したりすることで、心理的距離が縮まった。

- ・「私も水泳してたよ」と伝えたことで、それまで警戒していた子どもが心を開いてくれた。
- ・「私もあんまり話すの得意じゃないんだ」と伝えたら、安心感を与えることができた。

④小さな成功体験の積み重ね

難しいことでも最後までやり遂げる経験が、自信と次への意欲につながった。

- ・折り紙の鶴を自分で完成させた経験が、「やればなんとかできるかも」という自信につながった。
- ・一度他のグループからレゴ®ブロックを借りることができた経験が、「もっと人が多いところにも行ってみよう」という積極性につながった。

⑤褒め方の工夫

「すごいね」「上手」という評価的な褒め方よりも、「今にも飛び出しそう」「本物みたい」という感想的な褒め方が、子どもの自己表現を促進したと考えられる。これにより、子ども自身が感情を言葉で表現する力が育まれた。

5.1.2 子ども一人ひとりの興味関心を引き出す環境設定

①段階的に参加できる空間設計

すべての子どもが最初から皆と同じ空間で活動できるわけではないため、段階的に参加できる空間や設定が必要であることが示された。

- ・レベル 1：完全に別の部屋・廊下（集団活動が難しい子ども）
 - ・レベル 2：パーテーションで区切られた空間（視覚的な区切りがあればその場に居られる子ども）
 - ・レベル 3：同じ部屋の端・隅（同じ空間に居られるが距離が必要な子ども）
 - ・レベル 4：皆と同じ場所（集団参加が可能な子ども）
- ・「パーテーションがあって、みんなと一緒に空間だけど区切りがある。（そのような場に行くことについて）『中、いかがですか？』と聞いたら、すぐに立ち上がって中に入ってきた」（学生パートナー振り返りより）
- ・ある子どもは、初回には活動場所に入れなかったが、8回の活動を通じて段階的にレベル 1 からレベル 4 へと移行し、最終回には皆と同じ空間で発表を聞いて感想を言えるようになった。

②「逃げ場」の確保

活動中に疲れたり、刺激が過多になったりした場合に、いつでも休める場所を確保しておくことが重要であった。

- ・静かな休息スペース（別室、廊下の椅子、パーテーション等）
- ・支援者と 1 対 1 になれる場所（休憩室、外のベンチ等）
- ・保護者のいる場所へのアクセス

③感覚面への配慮

感覚過敏のある子どもへの配慮として、以下の環境調整が有効であった。

- ・聴覚：静かになってから着席を促す、うるさい環境を避ける選択肢を用意、子どもの様子の観察と気づき、状況への問いかけ
- ・視覚：自分に視線が向かない状況を作る、アンケート記入時は見ないようにする
- ・経験：安心な場所であるという認識とその場に少しずつ慣れていくようにする

④時間設計

子どもの集中力や切り替えの難しさを考慮した時間設計が必要だと考えられる。

- ・活動の最初：全体の流れ、今回の活動の目的と具体的な活動内容を伝える
- ・全体の活動時間：60分程度が適切。
- ・一つの活動：20～30分で切り替えのタイミングを設ける。
- ・終了の予告：「あと10分」「あと5分」と予告することで見通しを持たせる。
- ・活動の切り替え：急に変えず、予告してから移行する。
- ・終了時：次回の活動の案内を伝え、期待につなげる。

⑤子どもとの関わりと距離

1対1の継続的な関わりが最も効果的であることが確認された。同じ支援者が継続的に関わることで、子どもの小さな変化に気づき、信頼関係を積み重ねることができた。また、分離に不安があり保護者が「安全基地」として機能している場合、急に離すと不安定になることがあるため、段階的に安心感と信頼感を積み重ねながら保護者との距離を調整していくこと、そのような保護者と同じ目標を持ち、状況を共有していくことも重要である。

5.2 支援者に必要な資質・能力

本調査研究において、子どもと学生パートナーとの関わりから、支援者に必要な資質・能力として以下を挙げることができる。

- ・待つ力：沈黙を恐れず、子どもの言葉が出るまで待てる忍耐力。答えを先に言わない姿勢。
- ・共感的理解：子どもの興味・関心に寄り添い、評価せずに受け止める姿勢。子どもの世界を理解しようとする態度。
- ・柔軟な対応力：子どもの状態や興味に応じて活動内容を変更できる柔軟性。代替案を提示できる力。
- ・観察力：表情、声のトーン、体の向きなど、子どもの微細な変化に気づく力。
- ・自己開示力：適切な自己開示で子どもとの心理的距離を縮める力。共通点を見つける力。
- ・省察力：自身の関わりを振り返り、改善につなげる力。
- ・協同力：保護者や先生を含めた関係者と状況や目標を共有し、全体で同じ方向性を目指して協力しながら進める力。

5.3 今後の課題

①子ども理解の深化に向けた課題

子ども一人ひとりの興味関心を引き出し、効果的な支援を行うために、本調査研究で帝京ラボが基盤とした領域を参考に、以下の視点も有用だと考えられる。

・発達心理学的視点：子どもの発達段階に応じた支援方法の理解

参考図書：『自己理解の心理学』2022 武田明典編著 北樹出版 ISBN-10:477930699X

・臨床心理学的視点：不登校・発達特性のある子どもへの理解と対応

参考図書：『子どもと大人の心の架け橋：心理療法の原則と過程』2009 村瀬 嘉代子 金剛出版 ISBN-10:4772410872

・教育心理学的視点：学習意欲や動機づけに関する理解

参考図書：『気になる子どもとの関わり方：33のケースから考える支援のヒント』2025 角南なおみ 学苑社 ISBN-10:4761408618

②人的リソースの確保

1対1の継続的な関わりが効果的であるが、フリースクール等の現場では人的リソースの確保が課題となる。

・大学生ボランティアの活用：教育学部・心理学部との連携

・地域人材の活用：シルバー人材、退職教員、保護者、OB など

・フリースクール間の交流

③支援者の研修・育成

支援者に必要な資質・能力を育成するための体系的な研修プログラムが必要だと考えられる。

・「待つ」「共感する」という基本姿勢の意識づけ

・子どもの特性理解と子どもに合った対応方法

・困難場面での対処法と中止判断の基準

・振り返り・省察の習慣化

④本調査研究で検証できなかった事項

・長期的な効果の検証：8回の活動終了後、子どもの変化がどの程度持続するか

⑤新たに浮上した課題

・「変化がない子ども」への評価：目に見える変化がなくても、活動の意義をどう評価するか

「大きな変化があったとは正直感じなかった。でも毎回同じように全力で取り組んでくれた。安心して過ごせる環境はあったのかな」（学生パートナー振り返りより）

5.4 まとめ

本調査研究を通じて得られた知見を総括する。

①活動内容の効果

全 8 回の体験活動プログラムは、子どものコミュニケーション能力、他者への関心、自己肯定感、他者信頼感、主体性、将来への展望など、多面的な効果をもたらした。特に、1 対 1 の継続的な関わりと、子どもの興味関心に寄り添った柔軟な活動設計が、効果の発現に寄与した。

②効果的な支援方法

子どもの興味関心を引き出すために最も効果的だったのは、支援者の「待つ」姿勢と「共感的理解」であった。また、「教える」「変える」のではなく、子どもが本来持っている力を「引き出す」という視点が重要であることが明らかになった。

③効果的な環境設定

子どもが安心して活動に参加できるためには、段階的に参加できる空間設計、「逃げ場」の確保、感覚面への配慮、適切な時間設計が重要である。すべての子どもに同じ環境を提供するのではなく、一人ひとりの状態に応じた環境調整が求められる。

④支援者に必要な資質・能力

支援者には、「待つ力」「共感的理解」「柔軟な対応力」「観察力」「自己開示力」「省察力」が求められる。1 対 1 支援では「深い信頼関係構築力」が、複数対応では「全体を見渡す力」と「優先順位判断力」がより重要となる。

⑤本調査研究の意義

本調査研究は、不登校傾向のある子どもへの支援において、心理社会的および発達の観点に基づく子ども理解と支援の手だてを提示した。特に、以下の点が重要な知見である。

- ・支援の本質は「子どもを変える」ことではなく、「子どもが本来持っている力を引き出す環境を整える」ことである
 - ・継続的な 1 対 1 の関わりが、子どもの信頼感と安心感を育み、変化の土台となる
 - ・「待つ」「共感する」という基本姿勢が、すべての支援の基盤となる
 - ・目に見える変化がなくても、「安心して過ごせる環境」の提供には意義がある
- これらの知見が、フリースクール等における子ども支援の場になんらかの参考になれば幸いである。

第6章 フリースクール等における研究成果の実践

本章では、第5章で示した調査研究の成果をフリースクール等で実践するための具体的な方法を示す。特に、少額の費用・少数の人員でも実施可能な方法に焦点を当てる。

6.1 実践のための条件

<費用>

- ・ICT（タブレット）
- ・外部の施設や屋外に移動するための交通費
- ・室内に置く材料の購入費（ブロック、画用紙、小麦粘土、折り紙、サインペンなど）

※子どもの想像力の育成を目指す場合、固定の使い方のもではなく、様々な使い方ができる材料を揃えるなど。

※人的サポーターは有志ボランティアさんを依頼するなど。

<支援者に求められるもの>

- ・子どもを理解する：発達心理学的視点、臨床心理学的視点、教育心理学的視点
- ・存在を認める：いるだけでいい・成功しなくてもいい・できるようにならなくてもいい
- ・子どもの様子をよく見る：なかなか発言できない子どもに対して表情や様子を見ることで子どもの内面の状態に気づく

<人員>

①1対1の担当

- ・同じ支援者が継続して担当することで信頼関係を積み重ねられる
- ・子どもの小さな変化に気づける

②保護者の段階的関与

- ・同席・介在
- ・同じ空間にいるが介入しない
- ・送り出す

6.2 当該活動により効果が表れやすい子ども

①実践の効果が表れやすい対象者

- ・創作・ICT・工作活動などが「得意」もしくは「好き」な子ども
- ・傷つき体験、他者への不信感、様々な不安等によって内に閉じこもりがちな子ども

②関わり方

・これまでの傷つき体験、他者への不信感、様々な不安等を理解したうえで、子どもの考え方や感性に関心を示し共感といった態度を一貫して持ち、継続して関わる必要があると考えられる。

6.3 望ましい場所・環境

- ・公園（自然観察、体を動かす遊び）
- ・図書館（調べ学習、静かな活動）
- ・博物館（動物や文化）
- ・公民館（広い部屋での活動）
- ・消防署・警察署（見学）

※各場所がそれぞれの子どもにとっての良さや課題があると思われるので、「体験すること」を重視する視点を持つことが必要かもしれない。

6.4 フリースクール等での実践（少額の費用・少数の人員で実践する方法）

<構成の仕方>

1年を通して、季節の行事を楽しみながら、フリースクールの子ども同士の関係性を深め、可能であれば地域の方々や学校との交流もあると子どもの体験が広がると考えられる。

- ・4月：春を見つけよう 近所の公園で自然観察
- ・6月：雨の日を楽しむ 新聞紙で傘・レインコート作り
- ・8月：夏祭り準備 射的・輪投げの道具作り
- ・10月：秋を見つけよう/ハロウィン 落ち葉アート/ハロウィンアート
- ・12月：クリスマス プレゼント交換用の手作りカードや作品等
- ・1月：かるた かるたの絵札作り
- ・3月：1年のまとめ 作品展・振り返り

<効果の測定方法>

簡易アンケートの具体的内容を以下に提案する。

①子ども用

- ・今日の活動はどうだった？ たのしかった ふつう たのしくなかった
- ・今日できたこと/楽しかったことを一つ書いてね： _____

※アンケートには、具体的にどうしたらもっと楽しめるのかに対するアイデアを対話で出し合うこともよいと思われる。

②大人用

・活動に参加できた 他の子と関わられた 自分から話した ・笑顔が見られた 最後までいられた など

6.5 実践に向けた留意事項

<子どもに対する留意事項>

- ・安心を優先する：環境・人・活動の安心を確保する
- ・子どものペースを尊重する：待つ・段階的に・無理強いしない
- ・子どもの表現を受け止める：一般的な枠に当てはめない

<環境に対する留意事項>

①即座に中止すべき状態：

- ・パニック状態（叫ぶ、暴れるなど）
- ・完全なシャットダウン（一定時間反応がないなど）
- ・身体症状（頭痛、腹痛、過呼吸など）

②一時中断を検討すべき状態：

- ・強い拒否反応の繰り返し
- ・過度な緊張（体の硬直、震え、落ち着きがなくなる）
- ・感覚過負荷（耳を塞ぎ続ける、顔をしかめ続ける）

③中止判断の原則：

・子どもの安全・安心が最優先で一度休んでも次につなげられる。「中止」ではなく「環境調整」で対応できることも検討する。

まとめ：身の回りにあるものを活かしながら、「続けること」「体験すること」を優先する活動、具体的には無理のない頻度で継続、先生方が疲弊しない設計、子どもが「また来たい」と思える内容を少しずつ積み重ねられることが後の変化と関連するかもしれない。また、地域に合った活動や、フリースクールの独自性などを再認識しながら、今ある資源やサポートを活かして新たな活動や内容を子どもたちとともに体験していくという姿勢も、子ども支援につながるかわりだと考えられる。